

# 清水安三による中国伝道の実証的考察

## ——1913年－1924年——

金 丸 裕 一

はじめに

日本組合基督教会牧師であり、教育者としても知られる清水安三(1891-1988)は、1917年から敗戦後までの約30年間の大半を大陸において過ごし、1920年代初めから中国人教育事業に取り組みはじめる。これが戦時期に到り世間から広く認知されはじめ、彼は「北京の聖者」と称讃された。

こうした清水ではあるが、実はいまなお残された謎や疑問点も多々存在している。それは、以下のように整理することが可能であろう。

第一に、そもそも従来は中国と無縁であった若き清水安三が、如何なる経緯で中国伝道を志し、かつ渡航を断行したのかという謎である。

第二に、同志社在学中から旺盛なる執筆活動を開始していた清水であるが、中国滞在僅か一年半しか経過していない段階で、にわかに「支那論」を多産し始めた。現在では、民国「新潮流」を速報したジャーナリストとしての姿も知られているが、その内実は如何なるものだったのか。

第三に、清水の前半生を彩る崇貞学園の設立過程も日時を含めてかなり曖昧であり、かつ相容れない見解が並立する状況にあった。はたして創立期の実像に迫ることは可能なのか。

以上を検討すべく本稿では、本人による著作物に加えて滋賀県立膳所中学校在籍時から密接に関わった近江ミッションや同志社関係の記録、及び清水安三が所属した日本組合基督教会の各種報告書など、原則として同時代に作成された史料を優先する編年史的考察に徹しつつ、中国伝道開始期における等身大の清水安三像を描くことを唯一の課題とする<sup>1)</sup>。

※ ※

本論に移る前に、当該時期の歴史全般を一瞥しておきたい。周知の通りわが国では、1912年の第一次護憲運動を機に藩閥・軍閥に象徴される旧体制に対する嫌悪感が拡がり、大正デモクラシーの時代を迎える。もっとも、その直接的原因は辛亥革命による大陸情勢の混乱を勢力圏拡大のチャンスと捉えた陸軍大臣上原勇作が提出した朝鮮半島での二個師団新設案を宰相西園寺公望が拒否したため、軍部大臣現役武官制を利用して内閣総辞職に追い込んだ画策にあった。陸軍の意を承けるが如く成立した第三次桂太郎内閣も、1913年2月に僅か53日で総辞職する。要するに、隣国たる中華民国の動向が日本の内政とリンクする時代が到来

したのである。

1914年7月に始まる第一次世界大戦に際して、わが国は日英同盟の「情誼」を理由に参戦する。11月には青島のドイツ軍要塞を攻略した後、更に山東鉄道に沿って済南まで進出・占領した。直後の1915年1月には対華二十一条要求を時の袁世凱政権に突き付けているが、いずれも1910年代後半以降の日中関係における大きな転となった点について、多くを語る必要はあるまい。

大正期前半の日本は、日清・日露に続いて第一次大戦でも勝利し、「五大国」に連なったという祝賀ムードのみならず、1915年下半年に始まる大戦景気がもたらした「成金時代」にも浮かれていた。欧州での戦争によってアジア・アフリカ市場における優位性が到来したため鉱山・造船・商事を中心に急成長を遂げ、国際収支面でも債務国から債権国へと転じたのである。重化学工業部門における第二次産業革命が進んだ時代である一方、物価上昇や労働問題の深刻化により各種の制限も必要となって来たので、労働集約型産業は規制のゆるい海外に進出して多くの利益を得ようとした。その典型例が、在華紡に代表される中国への直接投資である。

キリスト教界も、かかる時代風潮によりながら様々な活動を展開する。1912年2月の三教会同という見事な策略の下、教派神道・仏教とともにキリスト教は「国民道德の振興」と「社会風致の改善」を担う一翼として位置づけられた。宣教の対象も、日清戦争後の台湾や日露戦後に帝政ロシアから移管された満洲特殊権益地域・樺太、日韓併合後の朝鮮半島に続き、中国本土や南洋群島が加えられた。さらに、反デモクラシーや軍閥の象徴たるドイツを打倒した時勢にも、「神の下での平等」を信仰的に体現したみずからの姿を重ね合わせ、新時代を切り拓く主導者としての自覚を強めたのであった。これこそが、社会的福音と並んで帝国日本のキリスト教が叫ばれた背景でもある。だがこの「繁栄」は、1920年3月以降の戦後反動恐慌、更に1923年9月1日に帝都を襲った関東大震災による「鉄槌」を被り、徐々に「ぼんやりした不安」が時代を覆うようになった<sup>2)</sup>。

## ※ ※

次なる準備作業として、研究史整理も必須であろう。清水安三をめぐる史料には目視し難い陥穽があり、多くの論者はその罠に嵌ったと筆者は考える。直言すれば、1930年代後半以降に語られた清水安三自身による数多くの「回想」的な物語を「史料」と混同して利用し、甚だしきは後付けの記録を優先した結果として、大混乱が生じたのである。

すなわち、清水存命中に刊行された太田雅夫による大陸伝道の試論的分析、また田中芳三による評伝の場合、いくつかの自伝に依拠した分析を基本としており、テキスト相互間に存在する矛盾などは充分に掘り下げられていない<sup>3)</sup>。また、ジャーナリスト清水安三の実質的な再発見者である栃木利夫の先駆的研究は、五四運動期のテキスト発掘と解説に留まった感がある<sup>4)</sup>。

1990年代になると、寺崎暹による『基督教世界』誌上の言説の変遷を追う労作があらわれ、本格的テキスト分析の手法が登場した<sup>5)</sup>。以後、樽松かほるによる小泉郁子研究、李衛紅による崇貞学園史研究、また小林茂による文献詳読などが相次いで刊行されるも、後年の史料に引きずられてか、年代の確定などに混乱が生じた感がある<sup>6)</sup>。清水安三を広く江湖に知らしめた山崎朋子によるノンフィクションも、基本的には自叙伝に立脚した展開となっている<sup>7)</sup>。

こうしたなか、太田哲男による本格的な評伝は史料批判に立脚した分析を試み、現在に到る実証研究の礎を提供した<sup>8)</sup>。その後、清水安三の名を世に知らしめた『朝陽門外』も復刊されたが、丁寧な校閲が附されているため誤読の危険性はだいぶ減少したと思われる<sup>9)</sup>。だが他方、信仰の顕彰と継承に主軸を置いた近年の伝記の場合、残念ながら「回想」を用いた「実証」の作風を復活させた感もあり、人物史研究の難しさを物語るものであった<sup>10)</sup>。

したがって、ドラマティックな面白味は大幅に減少するが、実証的清水像の再確認は現在においても追究されるべき課題である。以下、既知の史実は多くを先行研究に譲り、新たな知見を中心に議論して行きたい。

## I. 奉天伝道前後——1913年－1918年——

清水安三は、1910年4月に同志社神学校に入学した。既に滋賀県立膳所中学校在学中の1908年9月に大津組合教会で洗礼を受けているので、会派的にも順当な進路である。これと前後して恩師のW.M. ヴォーリズ(1880-1964)は、八幡町においてヴォーリズ建築事務所やヴォーリズ合名会社、近江基督教伝道団などの活動を本格化しており、神学生の清水もこれと深く関わるに至った。

宣教とビジネス、社会事業などの複合体として歴史を重ねた近江ミッションは、ヴォーリズを慕う教え子の吉田悦藏(1890-1942)と村田幸一郎(1887-1956)、建築技師のレスター・チェーピン(1886-1974)、悦藏の母である吉田柳子(1866-1917)らによって支えられた共同体だ。1913年3月23日に大津教会で語った奨励「勝利の生活」を嚆矢として、神学校在学中に書かれた清水の作品は、凡て近江ミッション機関誌『湖畔之聲』に収録されている。

近江兄弟社社史資料室に、1911年と1913年に清水安三からヴォーリズに宛てた書簡2通があることも、桜美林大学の調査によって明かされた<sup>11)</sup>。1914年の夏、近江八幡組合教会は清水を臨時伝道師として迎え、神学生の岸田徳藏と共に野田・安土・米原・彦根・大津などで活動した記録も残される<sup>12)</sup>。

1915年3月19日、山田貞夫・緒方庸雄・周再賜ら同期生とともに卒論朗読会に臨んだ清水は、「トルストイの内面生活」と題する論文を以て神学校を畢えた<sup>13)</sup>。恐らくは同年6月に発行された『神学之研究』掲載の論文と同じ内容だろうが、聖公会信徒で陸大教授兼立教大講師であった杉浦貞二郎(1870-1947)主宰の学術誌に卒論が掲載されたのだから、評価の高さが窺い知れよう。

これに先立つ1月8日、近江ミッションでは牧師の歓迎と清水の歓送を兼ねた集会が開かれ、65名が参加したという<sup>14)</sup>。同志社卒業後の5月、元々は近江ミッション協働者となる予定であった清水は2年間の海外実務を理由に退団したが、それは破棄され基督教世界社に就職した旨が紹介された。記事は「わたくしたちは彼が最終的に近江に定住することを心待ちにしている」<sup>15)</sup>とラブコールを送り、新たな選択を非難するようなコメントは、管見の限り見当たらない。

だが基督教世界社での勤務も、腰を据えたものにはならなかった。すなわち、1915年12月1日に、清水は敦賀第十九連隊に入営する<sup>16)</sup>。1916年1月には大津歩兵第九聯隊第一中隊六班に転じ<sup>17)</sup>、「身は殺風景な家に在り藁布団に包るゝも、ふと北窓に凭つて嘯けば茂るポプラの葉越しに比叡比良の故山手に取る如く遙望致され申候〔。〕小生今暫し邦家の為め武器を手にして弱き意思を鍛へ時来らば見えぬ兵器以て靈戦可致念じ居候〔。〕思へば漠々たる練兵場もわが練膽場、灰色の兵営もわが修道院に御座候」<sup>18)</sup>と、将来の飛躍を期した上での志願兵服役だったようだ。

一年後の1917年1月、「小生は靴を倒にせば血汗がほとりほとりと滴る程歩かされたる機動演習も無事に終り、今は苦しかりし雨の夜の露營、霜降る月下の陣も総てが思出の種と相成り申候。付ては小生如何なる御摂理の下にか終末試験に及第せし為め今半年兵営生活を致さざるべからず事に相成り申し候」<sup>19)</sup>と、軍隊内部での活躍を示唆する近況も報告されている。

同年2月の段階においても、膳所の馬場学生YMCAの立役者たる清水をめぐる回想が*The Omi Mustard-Seed*で公表されるなど<sup>20)</sup>、近江ミッション側の手放し難い思いは継続していたと思われる。

しかし同年半ばに、状況は急展開した。すなわち、

一年有半の兵営生活は鍛錬と忍耐雑多の恵賜を供し申候。而して艱苦の生活に一日の慰労休暇をも自ら与へずして満洲に向ひ申候。赴任の途に一快一哀を感じ申候。母校校友の各地に於ける奮闘を見ては今更快然たらざるを不得候。心して見ざるべし、勉めて偲ばぬ、と心定めしも各地に日清日露の戦跡を見せつけられて、惨を偲び、酷を懷はしめ、遂に使命を国際的に考へ、空想して世界の平和を想はしめ申候。悲喜交々胸に迫り道中甚だ面白く候ひき。十四日海老名先生等と共に、奉天に督軍張作霖を訪ひ〔。〕あまりに優しい然しスマートらしき風貌に接して人物の必ずしも風豊に依らざるを知りて自重致申候。当地は黄塵逆巻きて為めに天日暗く、開眼徒步に之堪えず、一步を街路に歩めば靴鞋忽ちにして褐色に変じ申候。言語不通、往来不潔、偶々城内邦人に会せば何んとなしく心強く候。此所に奮闘せんには余程の健康を要し候。肺を患ふもの多く、小児は育ち難しと聞き申候。洋人三十幾星霜宣教して今や大教会四ヶ所、伝道所数ヶ所有之、工業学校、神道学校、医学校等有之申候。而して伝道甚だ奮はざるに似て小生の如

きが如何に祈るも藻掻くも三十年十名の信徒を得るに満足すべきと思はれ申候。深思せば絶望、浅慮せば落胆の感少々有之候へ共〔、〕肺臓一ぱいに黄塵の溜るまでは死せじと心決め申候<sup>21)</sup>。

とある通り、清水は突如として奉天に赴任したのだ。ちなみに7月初旬、『湖畔之聲』にも第一報が掲載された。身内向け広報という原因もあるのだろうが、そこでは極めて厳しい新天地での環境と悲愴な決意が独白されており、同志社への報告との対比が興味深い<sup>22)</sup>。

そして附録の著作年譜にある如く、1918年以前に清水が執筆した主題は神学に立脚する文学や創作、またときおりみられる実務的な報告のみであった。いずれにせよ本人による同時代史料から我々は、満洲・中国伝道を志した内面的な動機や背景を確認することができないのである。

※ ※

他方、海外伝道という観点から周辺史料を熟読すると、大きな示唆が与えられる。以下、これらを時系列に沿って概観してみたい。

〈1913-1916年〉

周知の通り、日清戦争を機に朝鮮「同化」を目指して宣教を進めた組合派は、1910年8月下旬の日韓併合の後、官憲からの支持を背景に活動を本格化した。ともすれば、中心的担い手たる渡瀬常吉や海老名弾正の活躍に目を奪われがちであるが、「神に対する愛敬の念と共に内地人に対する感情を一新しつゝある見る〔。〕随つて彼等は我が帝国を呪詛するが如き旧精神を抛ち帝国の忠良なる臣民たらんを期する新精神を喚起しつゝあり」<sup>23)</sup>との認識に基づく教化献金の呼びかけには、二人以外にも小崎弘道・宮川経輝・綱島佳吉・牧野虎次・平田義道・高木貞衛・村松吉太郎・森田金蔵・荒木真弓・匹田精發・中村栄助が名を連ねている。朝鮮統治の安定こそ「我が帝国永遠の福利」<sup>24)</sup>に繋がるという大義名分を、組合派主流が共有した状況が看取されるだろう。

かかる潮流に対しては、教会が担う慈善事業や教育・社会事業に比して伝道はより重要であり、「伝道の好機を与へられながら空しく立ち、時を愚に過ごす僕婢」になつてはならぬという援護射撃もみられた<sup>25)</sup>。更に1914年、第一次大戦参戦により山東半島のみならずドイツ領北太平洋諸島部における優勢が確定した段階において、早くも「朝鮮なり台湾なり、或は布哇太平洋沿岸等に於る諸殖民地の教化」に際して、「外国ミッシンの援助の下にある教会等では、到底これを企図することが出来ない」ため、組合派こそが適任であるという自負すら確認できるのである<sup>26)</sup>。そして、徳富蘇峰が四半世紀前に夢想した如く「南は台湾澎湖島より北は樺太千島に延び西は満洲の一部にまでも膨脹」しつつある帝国圏での「神国拡張」を目指して、「夢想の一大幻境に大飛躍を試むべきである」と自らの召命を説く<sup>27)</sup>。



殖民地宣教には、「異邦人の悔改によりて、遂にイスラエル人の救を見るに到らんことを冀図した故事を偲び、海外殖民地の伝道が、遂に我内地伝道の促進を来す」という信仰的意義が付与された。そして「伝道費の如き、元より莫大なるものが<sup>328</sup>必用であらふが、無くてならぬものは必ず与へられる」という樂觀は<sup>28)</sup>、大戦好景気によって支えられたのだ。

これらを要するに、「大正四年の末には大連基督教会の加盟あり、引続き五年の年頭には膠州湾青島に伝道を開始し、間もなく沖縄組合教会の加盟あり、朝鮮大邱に伝道の開始あり、更に六年の春には南洋群島の占領地に慰問使を特派し、同年の初夏には満洲奉天に支那人伝道を開始し、我組合教会の伝道区域が、益拡大せられつゝあるを思はしむるものありき」とみえる伝道報告は、第一次大戦を梃に新領土を拡大した大日本帝国の歩みと軌を一にするのである<sup>29)</sup>。

そして、「東洋人の腹で消化せられた基督教が、日本より支那に伝はるに至つて、支那四億の同胞は必ず覚醒するであらふ」との使命感も、遂に公言されるにいたつた<sup>30)</sup>。同年末には、同志社校友会もまた「吾人の間より支那と親しむべく支那を指導すべく日支親善のため多くの青年犠牲を生み出さざる可らず」と、若人を大陸へ押し出さんと広報する<sup>31)</sup>。

#### 〈1917 年〉

1917 年になると、戦勝を意識した展望が更に強まり、「形而下の文明が劣悪と爲つた」のみならず「形而上の文明も、著しく退化した」中国は、「其の術策を棄てゝ真実吾人に信頼」し、かつ「吾人の指導を喜ぶに至るに相違ない」だろうとの確信すら表明される<sup>32)</sup>。これは同時に、朝鮮半島から大陸・台湾へと領土が広がる状況下、「吾等日本人の要事は東より西に多くなつた」という認識——換言すれば大阪に拠点を置く組合派の時代が到来するという希望的観測——を生んだ<sup>33)</sup>。こうした中、4 月下旬には原田助 (1863-1940) が杭州において開催された中華民国統行委辦会に参加した後に各地を漫遊し<sup>34)</sup>、5 月 20 日には大津組合教会で清水安三の送別を兼ねた懇談会が開かれ、その席で牧野虎次 (1871-1964) が奨励した<sup>35)</sup>。

6 月上旬には「奉天伝道の準備」のため、牧野は渡満した。そして清水も、同時期に満洲へ向かう。大阪朝日の記者は「支那に於ける同志社大学の先身ともなさんの大いなる抱負を有し居れる」と報じたが<sup>36)</sup>、いずれにせよ志願兵除隊直後の清水安三が満洲に派遣された背後には、かかる「組織の論理」が存在していた。着後まもない 6 月 14 日、海老名弾正 (1856-1937) と渡瀬常吉 (1867-1944) は、清水を従えて日本総領事館や各界要路に取り繋いだ<sup>37)</sup>、という。また原田助も、同志社から「多くの人物が輩出して、隣邦支那啓蒙運動に尽力する」旨を勧奨している<sup>38)</sup>。

ここで、注目すべき記事を紹介しよう。すなわち、

瀋陽基督教会 海老名、牧野、渡瀬諸師来奉以来、着々準備中たりし、組合教会奉天伝道は、様々なる天恩下に漸く講義所設立の運に到れり。山下永幸（奉天日基教会創立

有志者の一人）井上初之助（同教会長老）両氏家族は愈々奉天日基教会より当教会に転入せらるるに決し七月十五日夕、創立相談会を開催したり。当夕、熱烈なる祈禱会の後、教育設備、經常費、定期集会、役員等を議定し、役員は千頭直之、小川勇、山下永幸、井上初之助、福田稔の諸氏を以て創立委員となし、井上氏を日曜学校校長、千頭山下両氏会計庶務を担当せらるゝに決し、来る二十二日午後、満鉄沿線、組合教会員、及当地日基教会員を招待して、伝道披露会を開催し、二十九日より定期集会を開催するに決せり<sup>39)</sup>。

と見える通り、協同伝道の一環なのか他会派からの有力信徒の転籍を含めて<sup>40)</sup>、かなりのお膳立てができていた事実である。予告通り 7 月 23 日に瀋陽講義所は開設され、清水は同日付で着任した<sup>41)</sup>。

組合教会は、奉天に於て第一回目の聖日を七月二十九日に迎へ、組合教会の支那人伝道の、永遠に記念すべき聖日であつた。当日正午より清水安三氏は九名の支那人学生及青年紳士に、李徳権氏の通訳を以て説教し、『余は基督教が、支那民族の風俗、教育、宗教の欠陥を補ひ、之を破壊するに非して成就するものである。而して諸君は耶蘇教によりて、個人の自覚を根本的に得て、民主国の宝を完ふせられんことを望む』云々と述べた。当日邦人礼拝は十六名（求道者十名）夕懇話会八名であつた。日曜学校は邦人生徒三十六名あり又支那人日曜学校には生徒二十名余来つたが井上氏欠席の為休校して、カードを渡して帰した<sup>42)</sup>。

という速報からも窺い知られる通り、通訳に依存した伝道でありながらも、清水が旧体制の破壊者たる自身を語ったことは、記憶に留めるべきだろう。

同年 10 月 7 日、組合教会大会三日目の日曜学校生徒大会において一次帰国した清水が「太郎の満洲伝道」という御伽噺を披露した旨の記録も残る<sup>43)</sup>。牧野虎次は、「本部は阪神有志数名の特別寄附金を得て本年六月より満洲伝道即ち支那人伝道を開始せり。七月奉天小西関辺門外に瀋陽教会を設立し清水安三氏其の主任者として伝道に従事せり。目下会員十五名客員五名にして求道者三十七名を数へ日曜朝夕の集会二十名内外あり、然して支那人四名の受洗志願者あり」と紹介している<sup>44)</sup>。

11 月 9 日に名古屋で開かれた組合教会理事会では、「支那、朝鮮、台湾及び在外同胞伝道の主任としては原田助氏を、委員には西尾幸太郎、大沢徳太郎両氏」を選任した。伝道に必要な 1918 年度予算 6,800 円のうち、好景気に押されてだろうか既に 6,000 円は有志者より特別寄附の約諾を得て、残額の 800 円を各教会から募るとされた<sup>45)</sup>。同年末には、清水が同志社に「満蒙農産標本五十種一函及略説一冊」を寄贈した旨も記録され<sup>46)</sup>、母校に対しても気配りする若き日の姿が目浮かぶ。

## 〈1918 年〉

1918 年の史料は多くない。そんな中で、いわゆる「同志社紛擾」に絡む報道があった。曰く、社長継続不適格と批判された原田助が、数少ない擁護者であった高木貞衛との間で交わした「陰謀」を、前年 10 月の組合教会総会参加のため来日していた清水安三と磯部敏郎（1884～1976）が、偶々隣室で聞いていたというのだ。

清水君は往年日野神学部教頭に洋行を阻止されたと云が如き感を懷て日野氏に対する好感乏しく、磯部君も牧野氏に大した好意を有せざる者であつたので、知て知らざる風をして満洲に歸つて仕舞つたのである。後ち牧野氏が組合教会幹事として満韓を巡廻し奉天に至り、清水君に會したる際、清水君は告ぐるに此事を以てしたので此秘密は悉く明らかになつて仕舞つた、予輩は此事を斯く明確に記載するに当り、清水君に対して稍々気の毒の感を懷くものである。君は或は之が為に爾後、一種の迫害を或方面から受くるかも知れない。而れども君は曾は身に一劍を帯びて一朝君国に事あるの日には祖国の為に殉ずるの覚悟ある陸軍将校であつた。君の心中にはこの武人魂が今猶ほ磅礴して居る事を信ずる。君の精神意気は必や正義の道に邁往勇進して、精神界にも勇者たるの体面を發揮せらるゝ事と思ふ<sup>47)</sup>。

これに対して清水は、次のように弁明する。

『新京都』七月号誌上第五十七、八頁に見ゆる記事中予が日野先生に何か怨を抱ける如くあり、是れ全然誤謬に属するもの也、予は同先生に洋行を阻止せられしこと無し、只大正四年四月同志社神学部教授は予が洋行希望に対して、二年間実地伝道後に延期すべく勧告せる事実あるのみ。

予が高木貞衛氏邸に泊りて、高木、原田両氏会談の同志社に関する何事かを聞き、牧野虎次氏に告げしといふ記事あり、予は茲に明かに『聞きもせざれば告げもせぬ』と正直に弁ぜむとす、これは牧野虎次氏に未だ一言記事の出所を問はずして、斷言するを得る也<sup>48)</sup>。

原田助は同志社社長であり、彼に与したとされる大阪教会有力信徒で萬年社社長だった高木貞衛（1857-1940）も清水の有力なスポンサーだ<sup>49)</sup>。かたや牧野と清水の深い関係は既に見た通りである。大学昇格や教会政治など様々な利害が錯綜した紛擾に関わりたくない一心での発言だろうが、後段部分はさておき、注目すべきは 1915 年の神学校卒業時点では「洋行」すなわち欧米留学の希望を抱いていたと、他ならぬ本人が語る点であろう。

この渦中、1918 年 10 月 3 日に開催された組合教会大会の初日に磯部敏郎は「伝道の盛ならん為め」の題下で奨励し、「曰く第一に新時代に適應する大規模伝道の実行、第二に教師



の養成、第三に殖民地伝道、殊に満洲に於ける支那人伝道、第四に心と心の一致、即ちパーソナル、タッチを高調せられたり」とある如く、清水による事業の意義を述べた<sup>50)</sup>。しかしながら、西尾幸太郎(1868-1942)による評価には、かなり厳しい観察が含まれている。

昨年六月清水安三氏奉天に赴任し支那人伝道を開始してより未だ一年余に過ぎず創業日尚ほ浅きの今日に於て未だ何等報告するに足るものなきは当然にして、未だ準備中と謂ふべし。同氏は伝道準備として専ら支那語の研究に努め且つ多少支那人中に求道者を得て集会を催し、殊に医学堂支那学生間にバイブルクラスを開きて伝道を試みつゝあり。又遠からず日曜学校教師に適任の一支那人信徒を用ひて、支那人日曜学校を開設し伝道上一歩を進むるに至るべし。清水氏は又、方其余暇を以て奉天に在る組合教会信徒並びに求道者を集めて之が指導に任せしが未だ正式に教会を組織するに至らざるも既に二名の受洗者を得、組合教会信徒二十七名及び客員十数名の一同を見るに至れり。然るに同氏は此際専心支那人伝道に従事せんことを希望し、在奉の信徒は本部に対し邦人伝道専門教師の派遣を要求交渉中なり。今回南満洲鉄道会社より邦人市中の中央に会堂敷地として三百余坪の仮貸附を得たれば、之に会堂及び牧師館を新築するに至らば新市街の発展と共に伝道の効果見るべきものあらん<sup>51)</sup>。

すなわち、清水が志向した「支那人伝道」と在奉日本人信徒との間に生じた確執が暗示されたのであった。

## II. 北京での「不本意」なる日々——1919年-1920年——

### 〈1919年〉

かかる状況は、1919年になると新たな展開を遂げる。清水安三は、3月に奉天を離れた。彼は、「一年有半の奉天生活は青年者に取りて、涙の谷を余に多く過ぎゆくべきもの」であったと振り返った。日本人伝道を潔しとせず「只管この先見の明足らざりし過去一年有半の、半ば徒消の罪過を、支那人伝道有志と凡ての同情者に謝罪得罪」するとともに、語学の習得を誓った<sup>52)</sup>。そして北京へ転じて、語学訓練の名門たる大日本支那語同学会で研修の日々を過ごすにいたる<sup>53)</sup>。

他方、瀋陽教会を応援した巡回伝道者の木村清松(1874-1958)は、会派的な垣根を越え『基督教世界』に宣教報告を連載して、その存在感を大きくしている<sup>54)</sup>。西尾幸太郎による以下の報告は、相変わらず清水に対してかなり手厳しい。

昨年の総会は奉天に於て従来の支那人伝道の外更に邦人伝道を開始するの議を決せり。伝道部は此決議に基き昨秋より今春にかけ三回奉天へ京城の山本忠美氏の出張を煩はし在奉の清水安三氏と協力して邦人伝道開始の準備に当らしめ、本年五月更に木村清

松氏を数ヵ月滞奉の予定を以て派遣し邦人伝道を開始せり、爾来木村氏は伝道に従事すると共に会堂新築の計画を立て建築費募集に奔走尽力せられたるが其迅速熱烈なる活動に依り幸にして既に特志者の寄附金約参万四千円を得たり。……去八月下旬渡部守成氏邦人伝道主任として平壤より転じて就任し木村氏と共に活動中なれば遠からず奉天邦人教会の組織成るべく、木村氏は落成の上大伝道を試みらるる計画中なり。一昨年六月清水氏は支那人伝道の準備として猶専ら支那語其他の研究を要するものあるを認め本年三月限り瀋陽教会主任を辞任し北京へ留学せらるることとなりしなり。之れが為め瀋陽教会は当分更に新設さるるべき奉天邦人教会内に併設することとし、清水氏の留学費は特志者の寄附金を以て支弁することとせり、清水氏は目下北京に於て専心勉学中なり<sup>55)</sup>。

要は、主任教師を交代させたのである<sup>56)</sup>。ちなみに、清水が離れた後の「奉天教会」について、「大正八年五月四日設立、渡部守成、大正八年八月廿六日就任」とあり、名目上は新教会の扱いになっている点も留意しておきたい<sup>57)</sup>。この「左遷」はしかし、清水安三にとって新たな邂逅を呼ぶ好機に転じる。すなわち、五四運動の現地目撃者となったのだ。特に注目すべきは、以下の二点であろう。

第一に、「五四」に先立つ5月1日、「支那通」としてのデビュー作が、1918年の白虹事件を機に大阪朝日新聞社を退社した長谷川如是閑(1875-1969)や大山郁夫(1880-1955)が創刊した大正デモクラシーを象徴する総合雑誌『我等』に掲載された。

同誌は、梶田民蔵・佐々木惣一・河上肇・吉野作造・高野岩三郎・大内兵衛・矢内原忠雄など、一流執筆陣を誇る名門誌である。恐らくは失意の中で執筆された記念すべきこの論説は、西域アラビア人やユダヤ人はもとより、「苗族も、韃靼も、蒙古も、満洲も、この藍壺に飛び込んで、支那色に染まってしまう」と中国の同化能力の高さを説くとともに、「支那を国家として意気巻いてゐるものは」、極めて少数の「馬鹿の論客」に過ぎず、多数の「怜悯な民衆」は国家などお構いなしに「自己の幸福と安全と生存とを大切にしている」と観察する。他方で「日本が人種差別撤廃を主張する限り、台、鮮、支人に対する自分の態度を反省し改革するを要する」とも自省した<sup>58)</sup>。

これを嚆矢に清水は、附録の著作年譜にある諸作品を、様々なメディアに書きまくる。「五月四日北京焼打の日稿」と後書きされた時論においては、早くも運動の本質は「排日」にあり、その原因は日本側が少数の権力者と結んだ対中政策に終始し、多数の民衆を埒外に置く失策による旨を看破した<sup>59)</sup>。これ以上の言説分析は別稿に譲るが、表1が雄弁に物語る通り当初は親密圏内における刊行物が主であり、これが次第に総合雑誌や日刊紙に展開して行くさまが看取される。

第二に、「五四」を契機に脚光を浴びた民国の若き志士たちとの交流が開始されたことである。1919年8月に民本主義者として名高いクリスチャン学者の吉野作造(1878-1933)は「日支親善」のため「排日派教授学生」の日本招聘計画を立案したが<sup>60)</sup>、現地で彼らとの仲

表 1 清水安三による執筆量の概況——1913 年 - 1924 年——

年	字数	主な寄稿誌紙
1913	2,700	『湖畔之聲』
1914	10,600	『湖畔之聲』
1915	10,700	『神学之研究』、『湖畔之聲』
1916	270	『同志社時報』
1917	2,120	『湖畔之聲』、『同志社時報』
1918	2,100	『基督教世界』、『同志社時報』
1919	20,500	『我等』、『基督教世界』、『湖畔之聲』
1920	74,870	『我等』、『大阪講壇』、『生命』、『基督教世界』
1921	24,500	『我等』、『基督教世界』、『伝道月報』、『表現』、『讀賣新聞』、丸山昏迷『北京』
1922	174,600	『讀賣新聞』、『北京週報』、『表現』、『基督教世界』、『開拓者』、『生命』、『日本及日本人』
1923	148,100	『北京週報』、『我等』、『表現』、『讀賣新聞』、『基督教世界』、『生命』、丸山昏迷『北京 増訂第三版』
1924	292,300	『新人』、『北京週報』、『基督教世界』

出典：附録に基づいて筆者が作成。なお、発表済の原稿をまとめた著書二冊（1924 年刊行）は除外した。

介役を担い胡適の来日を実現させたのは他ならぬ清水安三である、と吉野は語った<sup>61)</sup>。

#### 〈1920 年〉

1920 年に到っても組合教会内部では「支那人伝道準備の為め、北京に留学したる清水安三氏は、本年度も引続き同学会に在て専心支那語を学び且支那研究中」と紹介される<sup>62)</sup>。また「満洲伝道費金參百拾參円六拾五銭は大正八年一月より三月まで奉天に於ける支那人伝道費にして其内訳は報酬金及駐在費貳百円、教会家賃百拾壹円、其他貳円六拾五銭なり。因に同伝道主任清水安三氏は同年四月より支那人伝道準備の為め北京に留学することゝなり、支那伝道は一時中止するの已むなきに至れるなり。而して北京留学費は特別会計として有志者の寄附に依ることゝなりたれば本經常費に關係なし」と決算報告された通り<sup>63)</sup>、組合教会による経常的な伝道活動とは別枠に位置づけられた。

だが、「支那に居る日本人の為の教会」ではなく、「支那人伝道の為」に「祈禱と研究と熱心の心」を持つ教会が必要だという思考は<sup>64)</sup>、時代の一潮流であった。同年 3 月には上海でも現地人と協力した活動を目指す日中基督教公理教会が組織され、古屋孫次郎(1880-1958)を牧師に招聘しているが<sup>65)</sup>、その資金 3 万円は三井からの寄附であったとの報道もある<sup>66)</sup>。

ところで同年夏、初めて訪中した賀川豊彦(1888-1960)の北京案内を、清水安三が担った。その訪問先や印象について賀川は速報するが、胡適らと面談したほか、後に清水が半生の情熱を傾ける貧民窟にも出掛けていたようである<sup>67)</sup>。後の経歴を考えると、非常に大きな出会いであった。二人をを引き合わせた人物として、既に交流があった吉野作造は極めて自

然に連想されるだろう<sup>68)</sup>。他方、清水の古巣たる近江ミッションに架橋役を求める見解がある<sup>69)</sup>。しかし何れにせよ、日清戦争を契機に多様な次元で生まれた中国に対する関心の集積を忘れてはならない。それらが徐々に熟した結果、日本プロテスタント教界では大正初年段階において〈中国情結〉を共有するクリスチャン・ネットワークが形成されており、それらが重なった一つの結果と読むべきであろう<sup>70)</sup>。

ところで 1920 年 4 月初旬、上海で刊行されていた英字新聞は安慶発で次のように報じた。すなわち、清水を名乗る日本人伝道師が欧米人宣教師に対日ボイコット中止を呼び掛けて欲しいと呼び掛けている。日本国民の中には宣教師が仕掛け人だと考える向きもあるので、反日プロパガンダに賛同していると誤解されぬよう願う<sup>71)</sup>、という内容である。事実、清水の思いは複雑である。例えば、次の史料をみよ。

朝鮮伝道も、支那人伝道も世界兄弟主義の上に立たねばならぬと信ずる。然るに英米人はいつも排日主義又は、日本抜きの世界兄弟主義の上に立つて伝道してゐる〔。〕誤つた東洋伝道から彼達を救ふものは、日本に在る宣教師と日本基督教徒の努力である。……国家を忘れて、国家を益すること位、大きい愛国者の仕事はない〔。〕私達は国家を屁とも思はぬ心持ちによつて日本魂の光を異邦人に輝すことができるのである。……朝鮮人を真に益してゐるといふ自覚があれば、朝鮮の豫算案として伝道費を挿入させて、そのお金をこちらの主義精神で用ふることに、何の不合理があらう<sup>72)</sup>。

これは、大阪組合教会牧師の宮川経輝が主宰した雑誌で述べられた本音に近い言表だろうが、明らかに欧米宣教師への「反撥」がみられ、更に渡瀬らによる朝鮮伝道に際する「機密費」問題に対しても理解を示す。他方で「国家的利益の上に立つて伝道することは、有害無意味」であり、「只神を信じて自らを潔め乍ら、支那人を隣人とする〔。〕這ういふ伝道者が居れば、国と国とは必ず平和を日々に増すであらう」<sup>73)</sup>とも述べているので、己が伝道と「国家」との距離感の調整は、清水にとっても自問すべき課題となっていたのである。

### III. 奉仕事業と「文筆家」活動——1921 年 - 1924 年——

#### 〈1921 年〉

1921 年に到っても、組合教会内部における清水の位置づけに変化は見られない。「北京留学費報告」の項目には、収入が 1400 円で全てが有志寄附金、支出も同額で、内訳をみると留学費 1335 円、旅費その他が 31 円 65 銭、次年度繰越金 33 円 25 銭と、素気なく報告されている。「有志寄附金は特に有志者二名より収入したるもの」であり、「留学費は支那伝道の為め北京に於て準備中なる清水安三氏の留学諸費として支出したるもの」とみえ、篤志家の献金によって支えられる活動と捉えられていたようだ<sup>74)</sup>。

ここで、同年における文筆活動を確認しよう。

まず、従来の研究で見落とされた感がある中国キリスト教に関する速報である。大日本支那語同学会の級友であり、清水よりも年少の丸山昏迷 (1895-1924)<sup>75)</sup> が編集した北京探索ガイドブックに寄せた記事は、プロテスタントを中心とした教勢を概観した後、北京における各会派の動向を紹介する。そして、宣教師についてさりげなく「日本人の中には西洋人は金で人を釣つてゐる如く思ふが〔、〕彼等支那信徒とても受くるより与ふるは幸なり位のことには知りもし云ひもしてゐる」と述べ、また「日本人がスパイ的に来聴して、支那語の稽古旁々聞いてゐる」ことに対する中国人牧師の苦情も加筆し、個性ある指南を意図していた点が読み取られる<sup>76)</sup>。

ついで清水は、新たに宮下軍平が経営する二松堂書店の総合雑誌『表現』に寄稿を開始した。同誌では、京都帝大卒業後に徳富蘇峰の国民新聞社勤務を経験した経済学者の河田嗣郎、また谷本富や永井柳太郎、中国関係の内藤湖南などが健筆を揮っており、名門誌と評して良いだろう。だがこの年の清水による執筆量自体は、前年比で四分の一程度にまで減少した。その最大の原因は、新たな事業への参画である。周知の通り、民国十九年華北大旱魃の救済活動から派生した「崇貞学校」の創立である。後日の自伝や回想録には様々なエピソードが付加されているが、本稿では先ず救済事業の担い手であった日華実業協会が遺した記録から、その経緯を追跡したい。

1920 年秋以降、現地から届く惨状の報せ、あるいは東亜同文書院生からなる調査団の現地視察<sup>77)</sup> などを経て、わが国の官民各界でも救済の必要性が叫ばれた。欧米各界もやがて華洋義賑救済総会 (China International Famine Relief Commission) に継承される支援活動を開始したため、「五四」後の排日気運を軽減させる効果も狙って、人道支援が模索されたのである。教界誌にもたびたび義捐金募集が告知されるが、日本側で担い手となった組織は、渋沢栄一 (1840-1931) を会長に戴き、現地では中華民国交通部顧問にあった中山龍次 (1874-1962) 居留民団長を中心とした日華実業協会だった<sup>78)</sup>。

清水安三の動向について、逸早く調査を進めた東亜同文書院の報告書は次の通り記録する。日華実業協会によって 1921 年 3 月 7 日より朝陽門外太平倉に設置された北京災童収容所は、募集当事者は清水安三、YWCA 幹事の湯葆元、及び北京基督教会幹事の王為であり、応募児童数は 592 名であったが 175 名は逃亡し、同年 5 月 31 日に終了した<sup>79)</sup>、と。

当事者である日華実業協会の報告書には、以下の如くある。

朝陽門外災童収容所ハ日本組合教会牧師清水安三氏主トシテ之ヲ担当シ支那陸軍部所有ノ大平庫ヲ無料借受ケ之ニ小修理ヲ施シ中国方面男女十数名ノ協力ヲ得平均五百人ノ災童ヲ収容スルノ目的ヲ以テ三月七日開始シ六月二十五日閉鎖セル迄収容災童数ハ六百七十九名ニ達シ之ガ延人員三万二千五百三十七人ニシテ募集地区四十二県ニ及ビタリ [。] ……

尚数名ノ講師ヲ招聘シ中国小学校制度ニ則リ国文、修身、算数等ノ三課目ヲ教授スル



コトトセシニ収容当初目ニ一丁字ナキ兒童モ解散ニ際シ平易ナル文字ヲ解シ簡單ナル算数ヲ為シ得ルニ至レリ<sup>80)</sup> [。]

収容所で簡単な教育を施した事実が記される一方、逃亡兒童数云々には触れない。興味深いことに所長として清水安三のほか、共に三井書院に所属する大橋義一と横堀繁治が連記されており、三井書院の粕谷夏五郎と中島彌太郎、日華同仁医院の佐波古直明、北京大和俱樂部書記の瀧久馬が事業に関わったとする。また中国側協力者として、北京地方服務団長の王洞陳以下、楊葆元・王為・金瀛・王毓秀・南桂彬・虞其剛・林承蔭・傅秀慧・賈淑貞・袁淑貴・王佩珊・畢淑貞・馬瑞秀・徐鑄森の氏名を記す<sup>81)</sup>。

これらの人々の背景や経歴などは不明であるが、少なくとも日華実業協会は、複数の善意が集積した結果としての事業だと認識していた。後の自伝や回顧録類との照合作業も、今後の課題となるだろう。

因みに民国内政部も、「徑啓者、准日華實業協會代表中山龍次函開、前請貴處借給朝陽門外太平倉空屋、以爲敝會收養災童之用。當蒙函商陸軍部、派徐君思・誠趙君恩綬會同敝會所派清水安三・田村治平兩君親赴該倉將空房兩座接收清楚。此皆由貴處及陸軍部格外通融、故肯概予撥借、敝會實不勝感謝之至等情、到處相應函達／貴部查照可也、此致／陸軍部」と記録し<sup>82)</sup>、日華実業協会の活動だと見做していた。

そして他ならぬ清水自身も、3月下旬にこう記す。「北支五省の大旱災」について考究しようとしたが、「終には人々に頼れ、強いられて遂々深入り」したため、1月22日に北京を発って各地で調査を進めた。その際「日華実業協会は小生を用ゐて北京朝陽門外太平倉に五百名の災民兒童収容所を設立」した、と。彼は経費として「一万五千四百円与へらる」と述べ、5月乃至6月に兒童たちを原籍地に送り返した後も「平民学校を永久」に運営したい旨を表明し、ついては「神よ小生に一万円を与へ給へ」と祈る。同年2月で留学期間を終えた清水は、次なるビジョンを発見したのである<sup>83)</sup>。

結果、この幻は形而下の存在として徐々に結実していく。そのありさまについて1921年秋、清水は次の通り報告する。未見史料であるため、全文を紹介したい。

言を回せば五年前、新緑の初夏六月、海老名、渡瀬、牧野諸先生と共に支那伝道を志して満洲に行きました。彼処で一年有半、半は邦人伝道に勤め乍半は支那語を学びました。同じく鐘を突くならば高いところだと思つて北京に留学させて頂きました。

北京に来てから已に三年余、この間は大層私は恵まれました。舞台が大い丈けに支那の事情も、学び易く、語学もめつきり発達しました。約一年は日本語は成る可くつかはないやうに日本文英文共に目に触れなくして、支那語のバイブルを朝夕の友として支那語の研究に向つて邁進しました。折々は人々から支那語狂とまで笑はれもしましたが今から思へばよくやつたと我乍ら健気に回顧致します。

支那語もまあ物になつたと思ふ頃、私共は支那飢饉の救済に一働致しました。山東河南直隸山西の諸省を、調査して、屢々支那稀有の飢饉を報告したのですが、日本内地でも、小学生の幼きものから実業家の富めるもの迄、応分を尽して支那飢饉の為に捧げました。その総高は一百万円であつたと記憶してゐます。その内約三万円を託されて、飢饉地の児童を救済しました〔。〕排日の激しい今日この頃の支那に於て如何に飢ゑばとて、見も知らぬ私共にその愛児を託そうとは思掛けぬ事でありました。

私共は支那の片田舎に於て飢児約八百名を集めました、荷瀛車馬匹車の中で、子供と共に北京に來ました。瀛車には窓がない上に、彼達には天然痘もあれば、「ひぜん」のものもあり、さてはトラホームそれから南京虫といったやうな子供と旅する事とて、私は可成りの命掛けを感じました。妻も始めは余に冒険だ生命知らずですと申しましたが、自らも遂にどんな汚ない事でもと共に努めました。十六名の支那人を指揮して、或時は三助となつて私共は、文字通りに子供の足を洗ひ或時は教育を致しました。

六月二十五日、麦の実る頃、凡ての子供を其父母に返へしました。今春の麦作は豊作でしたから、親も子も喜びました。子供の去る頃は讚美歌も良く歌ひました。集めた頃は骨と皮の子もありましたが歸つた時はブリブリ肥えてゐました。襤褸を穿つて來た子が、蒲団と教科書と茶碗箸、バイブル等携へて歸りました。

村々の人達は私共を拝む如くに遇しました。私共は冷汗を流し乍ら、その歡喜を受けました。そうして六月の終には私共は再び閑散な身になりました。丁度三月から六月の四ヶ月間は私共に取つて忘れ江ぬ喜びの月日でした〔。〕私共この四ヶ月の仕事で、天国へ行けるとまで喜んだのでした。

飢餓救済で得た経験から自信を以て北京の一隅に支那人の子供の為に、この五月小さい学校を建設しました。只今は六十名のものが私共二名と支那人教師兩名に依つて、小学校の課目を勉強してゐます。私共は小さいこの学校から、仕事を始めて、支那人教育と伝道を始めます。只今では経費は一ヶ月百円位ですが、この三四年はこのスモールスクールで、コツコツやつて、そうして、前途に大きいヴィジョンを抱かうと思つてゐます。これが同志社大学のやうに育つかどうか、は、凡て神様の聖手の力と、長い年月とに依て懸つてゐると存じます。私共は国家を超越し、眞の魂との接觸に依つて、日支の人達が理解する為めの小さい働をしようと思つてゐます。どうか私共が支那同胞の為に、今年からスタートを切つた事を覚えて頂いて、お祈下さいますやうに祈ります。

創業の難を悩み乍ら、泉山成瀬仁蔵先生、若王子山頭の二つの墓を訪ふて私は地に伏してその青い草を額寄せて遼遠なる前途の為に祈りました。私のこの重い心を理解して下さる方は、デビス先生であり、新島先生であると思ひました。折柄、秋風若王子山上の松林を襲ふて、松籟身に迫つて、暫し私は去り難い心に泣きました。眼を遠く放てば赤煉瓦の同志社大学は御苑の遙か向ふに眺められました。噫私も支那に歸つて、支那の土になりませうとは私の祈でありました<sup>84)</sup>。

なお、11月6日に清水は古巣の八幡教会に戻って新たな取組みを語った。来会者たちは、近江ミッションを去った時には失望したが、それがようやく「神の意志」だと知るに至った、と感嘆した<sup>85)</sup>。ついで年末のクリスマス礼拝に際しても、彼は再度同地を訪問している<sup>86)</sup>。恐らくは様々な支援を募っていたのであろうが、自伝に屢々記される「破門」云々の実像を知るエピソードになるだろう。

#### 〈1922 年〉

同年の清水安三の留学費は 1,704 円と若干増額するも、組合教会は相変わらず「支那伝道の為め北京に於て準備中」と扱う<sup>87)</sup>。だが彼は、これに安穩としていたわけではない。同年 1 月には、創刊された極東新信社社主の藤原謙兄を主筆とする『北京週報』の記者に就任する。同誌は、外務省・陸軍・軍閥などからの援助を断って言論の独立を維持せんとし、やがて発行部数は在外邦文誌として異例の一万部に達した。清水には丸山昏迷（幸一郎）と同じく月給 100 円が支払われ、執筆記事数は藤原以外では断トツの合計 77 件を数えた、という<sup>88)</sup>。さらにこの年から、讀賣新聞にも本名および筆名「如石」を用いて特派員よろしく連載を開始した。また『表現』誌では、内藤湖南や稲葉君山など「悲観論者」と一線を画し、「学者、学生、若き支那人の指導に依つて出て来るであらう」力を確信する旨の立場を鮮明にする<sup>89)</sup>。加えて、右派的色彩を帯びつつあった三宅雪嶺 (1860-1945) 主宰の『日本及日本人』にも寄稿し、言論活動の幅を広げたのであった。

ただ、彼は教界に向って、次の近況報告をする。

去年五月にスタートを切つた私達の支那人小学校は、彼是一年を過ぎました。……五十二名の子供が、一年間雪の日にも雨の日にもよく出席しました。最初は六十名ありましたが、借りた家が余に小さいので、二名を断りました次第、何といふ可憐な仕業をしたとでせう、けれどもそうせねばその生徒の机が邪魔になつてドアが締らないのでした。……去年十月、私は祈の一つを抱いて日本に帰りまして東京で一生懸命に募金の法を講じました。けれどもそれは失敗でした。で、悲しみを抱いて神戸に参り、或る日田村新吉様を訪ねました。……噫田村さんはお祈りして来られたのでした。そうして金五千円也を寄附して下さいました。田村様から神様へ、神様から私共へ下さつたお金が、我校の基礎となつたとは思ひます。我校は帝国の対支政策から生まれたとは、永久に記念すべきだと思ふ。更に其後校舎建築費として更に森村豊明会から五千円を頂きました<sup>90)</sup>。

興味深いことに文筆活動については、全く語られていない。戦後不況という逆風を押して、大卒サラリーマン初任給が 50 円から 60 円といわれる時代に「留学経費」年額 1,700 円余を得ただけでは飽き足らず、新事業のそれをも確保しようと孤軍奮闘する姿がアピールさ

れる。4月には記者を勤める『北京週報』誌上でも「崇貞女学校」のために奔走する模様が紹介された<sup>91)</sup>。メディアを通じた宣伝効果を期待したのであろう。

同年9月には、会計報告と献金依頼を兼ねたトラクトも発行した。ここでは、日加貿易で財をなした衆院議員で神戸教会員の田村新吉(1863-1936)、晩年に受洗した森村市左衛門(1839-1919)の遺志を継いだ財団・森村豊明会、また広告会社萬年社社長で大阪教会役員の高木貞衛(1857-1940)などに謝意を述べ、一年有余の教育を経て災童の田福章という少年を天津同文中学に進学させた実績を誇った。ここでもさり気なく、在北京欧米ミッションスクール内にある「公会堂の側に佇む小さき便所」ほどの建物が「自分に与えられるならば、私だつて、『受くるよりも、与ふるは幸なり』といふ真理を、経験して見るのが能きやう」と書き足し、「毎月約銀百円」を要する学校運営費の献金を呼び掛けている<sup>92)</sup>。

幻の実現に向けて多寡を問わず浄財を募り、かつ自身も何かしらの営利活動に勤しむ生き方には、中学時代からの師たる W.M. ヴォーリズを彷彿とさせる勤勉さとたくましさがある。単に社会事業への情熱だけではなく、「ホラ吹き」とすら揶揄された摂理信仰をも恩師から継承しているという観察が、極めて適切であろう<sup>93)</sup>。

尚、この年2月には不正常な両国関係を改善すべく元田作之進・千葉勇五郎・小平国雄・山本邦之助が訪中して先方の不満を聞き、対応策を模索せんと行動した<sup>94)</sup>。同じ時期に組合教会の海老沢亮(1883-1959)は、個人的な「安心立命」を超えた「社会的福音」を東洋民族に知らしめるこそが日本の使命だと説く<sup>95)</sup>。いずれも清水の事業を後押しするが如き潮流といえよう。

他方で、中国側には「弱いものと見れば、どこまでもノシ掛つて来るのを役得かなぞの様に心得て入る彼等の国民性の弱点」があり、日本に対する「同情ある理解」がなされていないとの不満も燻っていた<sup>96)</sup>。だが管見の限り、こうした活動に清水が関与した形跡はない。恐らくは「現場」に専一したものと思われる。

## 〈1923年〉

1923年6月になると、清水は漸く「北京日本人教会／支那北京崇文門内八室胡同伊東豊治気付／大正十一年六月三十日設立／伝道教会／主任牧師清水安三／大正十一年六月三十日就任」と見える通り、牧師に立てられる<sup>97)</sup>。だが宿願であった中国人向け伝道者ではなく「日本人教会」牧師に按ぜられた事実に「妥協」を見いだすのは、私だけではあるまい。

この年の最大の邂逅は、大原孫三郎(1880-1943)の知遇を得たことであろう。周知の通り大原は、岡山県の大地主で倉敷紡績などを経営する実業家であるが、早稲田在学中に重ねた放蕩を石井十次(1865-1914)との出会いを機に悔改めて受洗し、日本組合基督教会倉敷教会の創立メンバーとなった。その後も、石井記念愛染園や大原社会問題研究所、倉敷労働科学研究所など慈善・社会事業の運営に情熱を注ぐ生涯を送っている。

あたかも紡績業は戦後不況に見舞われ、倉敷紡績も青島進出を計画した。その妥当性を視

察すべく、大原らは3月26日に上海入りした。一行は杭州・南京・漢口を訪れた後、4月11日に北京に到着した。在北京大蔵省財務官の公森太郎(1882-1953)に推挙され、清水安三が通訳に選任された。訪問期間中のエピソードは割愛するが、四日間の案内で大原に見込まれた清水は、なんと米国留学に要する金銭的支援を確約された<sup>98)</sup>。

そのためであろうか、従来にも増して執筆活動に熱を上げ、1923年から1924年にかけての原稿執筆量を見ると、一日当たり常に原稿用紙1-2枚の完成稿を仕上げた計算になる。自らの事業が一步一步前進する自信からだろう、国家や軍隊の威力に頼らず「支那人に崇敬せられるやうな、新文化を建設せられるやうな」人々が移住して「支鮮日共力の新大陸」を築くが得策だと主張する<sup>99)</sup>。一年有余の実践の結果、教育界での権威と指導力を誇る帝国教育会からも「校長は日本組合教会伝道師清水安三氏之に当り教員には同師夫人美穂子女史並に民国任教員貳名が之に当つた」崇貞女子工読学校は、「支那に於て日本人設立の慈善小学校の嚆矢」<sup>100)</sup>、と評価されるに至ったのである。

さらに注目すべきは、後の『姑娘の父母—崇貞ローマンス』(改造社、1939年)や『朝陽門外』(朝日新聞社、1939年)、『希望を失わず』(桜美林学園出版部、1948年)の原型ともいべき作品が公表された事実である。「足洗ふ人」と題された連作は、本稿で見た災童救済事業から崇貞創立に関係する時期をめぐる「自叙伝」であり、以下に主たる内容を紹介しておこう。

「これといふ仕事もせず、北京に在つて支那語ばかりを勉強してゐた」清水は、1920年12月16日の朝、吉野作造から旱災が事実であるか否かの照会を受け実地調査の必要を感じ、翌17日には「飢饉地」に向かい「痛ましい経験」を重ねた、という<sup>101)</sup>。この日付は既に見た1921年における清水自身による報告とも矛盾するが、各地の窮状に心を痛め、時に「淫売」に誘惑されながら、行程を終えた<sup>102)</sup>。

北京に帰着した1921年1月14日の夜に開催された「飢饉救済協議会」に参加した在留邦人は、清水一人であった。飢饉の真偽や義捐金交付の方法めぐり議論は混乱し、求められた清水は視察した惨状を語る。そんな折、2月初めに「東京のミリオニアー」が一万五千円を提供して「日本人で自ら飢饉救済に従事したいもの」を募った。苦しむ人々のためには「偽善者の手先にもならう……ブルジョアの手先にもならう」と決心した清水は手を挙げ、2月7日には災童収容所設立が決定、清水は児童収容の準備を進め、自らも長辛店へと向かう<sup>103)</sup>、というストーリーである。だが話はこれで終らず、最終回には門頭溝に出張した折に同僚女性教員から同衾を迫られ云々とのエピソードまで書かれ<sup>104)</sup>、創作か実話かの区別が非常に困難な作品である。この段階において清水は、既に売文家として必須の能力——すなわち読者を楽しませる作法——を体得し、かつ実践していたのであろう。

ちなみに一時帰国中も関東大震災の経験を即座に活字化して、自警団に襲撃された中国人留学生を庇った老婆の話題などを紹介し<sup>105)</sup>、10月末には近江八幡教会で説教奉仕を行う<sup>106)</sup>。あらゆる事柄をプラスに作用させんと、八面六臂の活動は止むことがなかった。なお、同年



10月に刊行された北京指南書の増補版において、清水は単に各種データを新しい内容に差し替えたのみならず、ミッションスクール紹介のために紙幅を増加させた<sup>107)</sup>。教育と己との距離が近くなったからであろう。

#### 〈1924年〉

1924年8月4日、清水は米国に向って出発した<sup>108)</sup>。この年に発表した原稿の分量は、30万字に迫る勢いとなった。新しい寄稿先として、海老名弾正が主宰した『新人』も確認できるが、二冊の単著を除外して原稿用紙700枚を超える成果が世に問われたのである。

二冊の著書とは、共に吉野作造の序文による『支那新人と黎明運動—新儒教、新文学、新運動』（大阪屋号書店、1924年10月12日）、及び『支那当代新人物—旧人と新人』（大阪屋号書店、1924年11月10日）であり、従来成果を集大成したものだ。

後者の「自序」において清水は、同志社時代に読んだと記憶違いする蘇峰『支那漫遊記』が批判した中国に対する無関心を挙げ、「校門を出でて茲に七年、この間恰もこの一文を反証せむ為めに生けるが如くに、支那に伝道して今日に至つた。未だ小さい事業乍らも支那人教育の発足を為し、飢饉の折には七百の災童を救出して、飢渴を免れしめた。時の大統領から勲五等の嘉禾章を贈られた」と振り返った。欧米宣教師に与えられる「サバテカル」と同様「著者もまた七年を一期として、支那で働く決心」だったので、「支那研究も成るべく七年間に一切り着けられ相なものを選んだ」とも述べる。そして、来たるべき「サバテカル」では「静養せずして活養する為めに、米国留学の途に上る」のだと、船中にて決意を表明した<sup>109)</sup>。

訪米の動機については、この他にも「日本人が白人の国際帝国主義を隣国黄色民族に応用したるが為めに、今日の如く、日本は窮地に陥つた」<sup>110)</sup>であり、自身は「曾て排日運動の真最中の北京に来つた。今度また排日の米国に行く」<sup>111)</sup>が、「日本人は米国の日本人に対する態度に憤慨する前へに、日本の支那人に対する態度に憤慨すべきである」<sup>112)</sup>、などと説明されるも、同時代の史料に大原孫三郎の存在は記されていない。

組合教会機関誌『基督教世界』も8月14日、「崇貞女学校」を一面トップの写真入りで顕彰すると同時に、「清水安三氏の北京に於ける教育事業の如きは、全く支那を主としたる奉仕的の事業で、何等利己的精神が之に伴ふて居ない」と称賛、「相互扶助主義」と「共存共栄主義」の模範と評した<sup>113)</sup>。同号には、清水による次の総括も記載される。

大正十年五月創立。日本帝国教育会が五千着の棉衣を北京で仕立て、旱災児童に施与しました。その折私共でお世話しまして銀五百八十四円、安く出来上りまして余剰が生じました。それを最も尽力して呉れました王洞陳君に進呈しやうと申出ましたが同君は固く辞して受けませぬ。そこへ私共が日華実業協会の災童収容所 famine relief work に働かせて頂いた報酬に貳百五十拾円頂戴しました。それやこれやを合せて数百円になりま

した〔。〕当時の北支旱災委員長中山龍次氏の御尽力で一平民教育機関を創設することになり北京朝陽門外太平倉を借受け、遂に本校を設立することになりました。……こればかりのお金で学校を建設するとは、一見乱暴な行動の様ですが、……果してなくてはならぬものは与へられて満三年の後、今日は二千坪の敷地一万数千円の寄附金を得るに至りました<sup>114)</sup>。

だがよくよく考えるとこの米国留学は、同志社卒業時に適わなかった夢が七年有余の歳月を経て実現したことを意味する。初志貫徹というありきたりの表現では物足りない力量と執念を感じるのは、わたくしひとりではあるまい。

#### IV. 自叙伝の「改竄」について

最後に補論的ではあるが、清水安三の自叙伝が持つ「危険性」について、簡単に検討しておきたい。

本稿での編年史的考察を通じて、例えば崇貞の原型が生れた時期は1921年だと確定できた。しかしながら、『姑娘の父母』や『朝陽門外』などでは、終始一貫して1920年説を主張し、多くの研究者もこのズレにいろいろな解釈を加えてきた。

このなかには、(1)個人的かつ主観的にみれば「学校」は小規模ながらも存在したのだろう、(2)あるいは清水は勘違いが多いタイプであったとか、(3)大雑把な性格に由来するなど、様々な説が入り混じっている。だが、本稿執筆に先だって進めた史料調査の過程を通じて、わたくしはそれが故意になされた「改竄」であるとの確信を深めたので、以下に初歩的分析を通じた中間報告を附記したい。

例えば、1920年夏の賀川豊彦初訪中を回顧して、1939年に二人は対談した。ここで両者ともそれは「大正八年」（1919年）の出来事であったと語っている<sup>115)</sup>。この「前倒し」と関連してか、同年出版の『姑娘の父母』や『朝陽門外』における崇貞創立も一年繰り上げて1920年とくりかえし強調されることは、既に先学が指摘するところである。

こうしたなか、1937年4月段階で少女向け雑誌に掲載した「自叙伝」において清水は、飢餓救済に着手した始期を「大正八年」として体験を語るが、学校創設の年月は伏したままである<sup>116)</sup>。

ところが1939年前半になると、状況は変化する。同じ雑誌に、崇貞創立当時の「日記」なるものが二回に亘って連載されたのである<sup>117)</sup>。1920年5月10日から1921年12月26日に到る「日記」には丁寧な註も附され、編集時に加筆した部分までもが判明する周到な形式を取る。その内容は、後に出版される「日記帳より」（清水安三『支那人の魂を掴む』創造社、1943年8月、101頁～207頁）と全く同一であった。ここでは、単に創立年を1920年に繰り上げたのみならず、日付と曜日の擦り合わせも正確に行われる。要するに明らかに「創作」された「日記」が、1939年に突如として登場したのである。

ちなみに、1936年10月に支援者に向けて配布した『崇貞学園一覧』と題された和文・中国語・英語併記のトラクトには次の如くある。「大正九年の北支旱災飢饉」に臨んで開設された「災童収容所」所長を委嘱された清水であったが、「大正十年二月に日本帝国教育会は、六万着の綿衣を作り飢民に施与」した際にも「製作及び施与に参加従事した」。その事業が解散する時、「約五百八十円程の剰余金と、災童収容所に使用せし、机、腰掛、黒板等」を用いて「崇貞女学校創立を企つることを得た」。つまりこの時点では、1921年創立説が語られていたことになる<sup>118)</sup>。

更に、中国語文献も精査してみよう。

初期の名録には「崇貞女学校 朝陽門外神路街」と素っ気なく住所が記されるのみであるが<sup>119)</sup>、1939年の史料には「崇貞學園由清水安三先生創辦、那是二十年前的事：清水先生是基督教徒、他到中国來、在民國八年以前、那時候、北五省正鬧着旱災、他曾向本國募捐、救濟那些災民、當年的十二月、他便在太平倉辦了一個『災童收容所』、由清苑繞陽轉收了七百九十九個災童、過年來、麥子收成了、這個收容所便取消、可是、災童收容所也可以算是崇貞學園的老前身了」とみえ、「今年、八月二十五日是崇貞學園二十週年紀念日、他們將要舉行一個慶祝會、紀念清水先生、和他的夫人清水郁子、預料到那天會有一番盛況」<sup>120)</sup>とある通り、1919年説乃至は1920年説とも解釈できる説明がなされている。

かかる状況証拠を比較すると、恐らく1939年前半に「改竄」が必要となるなにかしらの事態が発生し、そのために清水は自叙伝においてキーとなる出来事を一年前倒しに操作して語り始めた、という仮説を提起せざるを得ないのだ。

次に、登場人物に関する叙述についても、若干を紹介したい。

災童収容所運営の中国側責任者と日華実業協会史料に刻まれた王洞陳の場合、渡米直前に書かれたであろう記録は、帝国教育会から委託されて製造した衣服の剰余金を「最も尽力して呉れました王洞陳君に進呈しやうと申出ましたが同君は固く辞して受けませぬ」<sup>121)</sup>と報告するが、後に「北京基督教社会事業部長」の汪として登場した際には、事業資金をくすねた役柄を与えた<sup>122)</sup>。あるいは、災童から選抜して教育を施し天津同文中学に入学させたと誇る田福章<sup>123)</sup>も、同姓同名で後の作品に登場させ、天津に旅立つ際に実子のために支度した白いズック靴を持ち去り<sup>124)</sup>、やがてヘロイン中毒で凍死する人間として描くのであった<sup>125)</sup>。

このように、恐らくは1938年から1939年にかけての時期、何かしらの理由があって崇貞の創立を1920年に早めねばならぬ事情が発生したため、急遽「日記」を作成したと史料されること、また関連人物をめぐる描写のブレを一瞥しただけでも、これらを「史料」として扱う危うさが判明するだろう。

前述した通り、文筆家たる清水一流のサービス精神に、歴史家が踊らされてはならないのである。

おわりに

本稿では、同時代に作成された史料に基いて 1917 年から 1924 年に到る清水安三の大陸伝道の実像を探った。この過程を通じて、以下の諸点が明確となったと思われる。

まず、彼の伝道は決して一個人の物語ではなく、第一次世界大戦という「波」に乗った日本プロテスタント教界、なかんづく日本組合基督教会の組織的潮流によって誕生した。系譜的には、明らかに朝鮮伝道論の延長線上に位置づけられる。ただし狭義の「伝道」のみを切り取って眺めるのであれば、湯浅與三が淡々と描く如き「失敗」と読むことも可能だろう<sup>126)</sup>。

こんな中で若き清水安三は、自らに与えられた場所と機会に満足するだけでなく、如才なく振舞って人間関係を取り結び、年長者や有力者、同輩からも愛され、信頼されるに至った。そして、幻を実現するために必要な「地上の宝」も、かかる人脈を通じて与えられる。だが彼は決してそれに甘んじることなく刻苦勉励を重ね、1920 年代前半には文筆により世俗的名声を獲得するや否や、新たなる世界へとチャレンジしたのであった<sup>127)</sup>。

だが反面、読み物としては胸躍る展開に満ちた自叙伝であっても、それに基づき歴史を論じることには大きな危険がともなう。別言すれば、単独で「史料」として用いてはならないのである。恐らく清水安三は、歴史的記録を残すための執筆ではなく、己が信仰を証詞せんと祈りつつペンをひた走らせたのだらう。

かかる意味において異能の伝道者・清水安三の魅力は、決して一箇所に安住することなき動的な実践にこそ見い出せるのだ。「北京の聖者」というイメージのみでその生涯を語らんとする方法の限界も、まさに此処に所在している。

(了)

## 【附録】清水安三著作年譜（稿）——1913 年 - 1924 年——

### 〈1913 年〉22 歳

清水如石「勝利の生活」（『湖畔之聲』第 10 号、1913 年 4 月 15 日）6-9 頁。【2,700】

### 〈1914 年〉23 歳

清水安三「送る心と迎ふる心」（『湖畔之聲』第 15 号、1914 年 1 月 5 日）3-5 頁。【1,300】

清水安三「孤独の生活」（『湖畔之聲』第 16 号、1914 年 2 月 5 日）5-7 頁。【2,200】

清水生「所感一束」（『湖畔之聲』第 18 号、1914 年 4 月 5 日）13-14 頁。【600】

清水生「向上の生活」（『湖畔之聲』第 19 号、1914 年 5 月 5 日）9-10 頁。【1,000】

清水生「嘲笑」（『湖畔之聲』第 19 号、1914 年 5 月 5 日）18-20 頁。【1,200】

清水生「心のどん底より」（『湖畔之聲』第 23 号、1914 年 9 月 5 日）2-4 頁。【1,900】

清水報「八月中雑報」（『湖畔之聲』第 23 号、1914 年 9 月 5 日）14 頁。【1,200】

清水生「自己の発見」（『湖畔之聲』第 25 号、1914 年 11 月 5 日）5-6 頁。【1,200】

### 〈1915 年〉24 歳

清水安三「トルストイの神学」（『神学之研究』第 6 巻第 5 号、1915 年 6 月 1 日）36-44 頁。【7,900】

清水安三「生活の権威」（『湖畔之聲』第 33 号、1915 年 7 月 5 日）2-4 頁。【2,800】

〈1916 年〉 25 歳

「校友通信」(『同志社時報』第 127 号、1916 年 1 月 1 日) 3 頁。【270】

〈1917 年〉 26 歳

「校友通信」(『同志社時報』第 138 号、1917 年 1 月 1 日) 74 頁。【230】

清水安三「故国の友に与へて」(『湖畔之聲』第 57 号、1917 年 7 月 5 日) 4 頁。【1,300】

「校友通信」(『同志社時報』第 145 号、1917 年 8 月 1 日) 10-11 頁。【590】

〈1918 年〉 27 歳

清水安三「日曜学校教師の遭遇せる實際的問題」(『基督教世界』第 1824 号、1918 年 9 月 26 日) 8-9 頁。【1,700】

清水安三「雑誌『新京都』七月号を読みて冤を雪がむ為めに弁明す」(『同志社時報』第 157 号、1918 年 10 月 1 日) 10 頁。【400】

〈1919 年〉 28 歳

清水安三「支那生活の批判」(『我等』第 1 巻第 6 号、1919 年 5 月 1 日) 28-33 頁。【5,700】

清水安三「北京通信」(『基督教世界』第 1857 号、1919 年 5 月 22 日) 13 頁。【700】

清水安三「甦改に生きる」(『湖畔之聲』第 81 号、1919 年 8 月 5 日) 1 頁。【1,400】

清水安三「支那人の新旧思想—国学から過激思想まで」(『我等』第 1 巻第 11 号、1919 年 9 月) 44-50 頁。【5,400】

清水安三「在支外人生活の批判」(『我等』第 1 巻第 14 号、1919 年 12 月 1 日) 21-28 頁。【7,300】

〈1920 年〉 29 歳

清水安三「若き支那に於ける諸問題」(『我等』第 2 巻第 1 号、1920 年 1 月 1 日) 49-56 頁。【6,400】

清水安三「排日の解剖(1)」(『大正日日新聞』、1920 年 1 月 13 日) 2 頁。【3,100】

清水安三「排日の解剖(2)」(『大正日日新聞』、1920 年 1 月 15 日) 2 頁。【1,300】

清水安三「排日の解剖(3)」(『大正日日新聞』、1920 年 1 月 19 日) 2 頁。【2,380】

清水安三「排日の解剖(4)」(『大正日日新聞』、1920 年 1 月 21 日) 2 頁。【1,890】

清水安三「文化運動としての排日及親善」(『我等』第 2 巻第 3 号、1920 年 3 月 1 日) 58-64 頁。【6,400】

清水安三「異邦伝道者の悩み」(『大阪講壇』第 231 号、1920 年 3 月 1 日) 26-31 頁。【4,100】

清水安三「寄書 理解すべき排日運動」(『基督教世界』第 1898 号、1920 年 3 月 18 日) 4-5 頁。【4,900】

清水安三「支那に於ける宣教師」(『大阪講壇』第 232 号、1920 年 4 月 1 日) 21-26 頁。【3,600】

清水安三「支那最近の思想界—民衆運動の動向」(『我等』第 2 巻第 8 号、1920 年 8 月 1 日) 27-34 頁。【8,100】

清水安三「果して日本基督教徒に支那伝道の使命ありや」(『基督教世界』第 1926 号、1920 年 9 月 30 日) 3-4 頁。【2,300】

清水安三「支那の戦争を目撃して」(『我等』第 2 巻第 10 号、1920 年 10 月 1 日) 61-63 頁。【2,000】

清水安三「新孔子論」(『生命』第 2 号、1920 年 10 月 1 日) 22-30 頁。【6,800】

清水安三「果して日本基督教徒に支那伝道の使命ありや」(『基督教世界』第 1928 号、1920 年 10 月 14 日) 3-4 頁。【2,100】

清水安三「支那亡国の兆ありや—支那の将来と対策如何」(『我等』第 2 巻第 11 号、1920 年 11 月 1 日) 45-50 頁。【5,100】

清水安三「講演 現支那の儒教 支那を救ふものは儒教か」(『基督教世界』1931 号、1920 年 11 月 4 日)



2-3 頁。【3,500】

清水安三「講演 現支那の儒教一支那を救ふものは儒教か」(『基督教世界』1932 号、1920 年 11 月 11 日) 3-4 頁。【2,600】

清水安三「支那を動かす迷信の力」(『我等』第 2 巻第 12 号、1920 年 12 月 1 日) 9-18 頁。【8,300】

#### 〈1921 年〉30 歳

清水安三「支那改造の原理—改造論の種々」(『我等』第 3 巻第 3 号、1921 年 3 月 1 日) 12-19 頁。  
【6,800】

清水安三「北京に於ける耶蘇教」(丸山昏迷編『北京』丸山幸一郎、1921 年 3 月 25 日) 422-439 頁。  
【5,500】

清水安三「北京通信」(『基督教世界』1951 号、1921 年 3 月 31 日) 6-7 頁。【1,800】

清水安三「支那伝道に就きまして」(『伝道月報』第 70 号、1921 年 10 月 20 日) 4 頁。【1,600】

清水安三「支那共同管理論の検討」(『我等』第 3 巻第 11 号、1921 年 11 月 1 日) 23-28 頁。【5,000】

清水安三「山東問題の解決方針」(『表現』第 1 巻第 2 号、1921 年 12 月 1 日) 119-121 頁。1、【2,300】

清水安三「直接交渉を中心として」(『讀賣新聞』、1921 年 12 月 28 日) 3 頁。【1,500】

#### 〈1922 年〉31 歳

清水安三「現支那を眺めて (一) —排日漸く淡し」(『讀賣新聞』、1922 年 1 月 1 日) 2 頁。【1,600】

清水安三「現支那を眺めて (二) —デウエイと支那」(『讀賣新聞』、1922 年 1 月 2 日) 2 頁。【1,300】

清水安三「現支那を眺めて (三) —文孫の北伐」(『讀賣新聞』、1922 年 1 月 4 日) 2 頁。【1,200】

清水安三「現支那を眺めて (四) —北伐と華府会議」(『讀賣新聞』、1922 年 1 月 6 日) 2 頁。【1,200】

清水安三「現支那を眺めて (五) —山東交渉と輿論」(『讀賣新聞』、1922 年 1 月 7 日) 2 頁。【1,400】

清水安三「現支那を眺めて (六) —愛国心は何処に」(『讀賣新聞』、1922 年 1 月 8 日) 3 頁。【1,700】

清水安三「支那基督教の新傾向」(『北京週報』第 2 号、1922 年 1 月 29 日) 6-7 頁。【3,400】

清水安三「支那婦人解放運動 (一) —三従四徳靠不住」(『讀賣新聞』、1922 年 2 月 10 日) 3 頁。【2,000】

清水安三「支那婦人解放運動 (二) —男女同学と職業」(『讀賣新聞』、1922 年 2 月 12 日) 3 頁。【2,400】

清水安三「支那婦人解放運動 (三) —参政運動と社会事業」(『讀賣新聞』、1922 年 2 月 13 日) 3 頁。  
【3,300】

清水安三「支那いろいろ」(『表現』第 2 巻第 3 号、1922 年 3 月 1 日) 135-140 頁。【5,700】

清水安三「北京大学に招かれたエロシェンコ君を周作人氏方に訪ふ」(『讀賣新聞』、1922 年 3 月 27 日)  
7 頁。【1,700】

清水安三「支那時局に対する変つた解説」(『我等』第 4 巻第 4 号、1922 年 4 月 1 日) 80-82 頁。【2,500】

清水安三「華府会議と支那」(『表現』第 2 巻第 4 号、1922 年 4 月 1 日) 221-228 頁。【7,500】

清水安三「北京通信」(『基督教世界』第 2002 号、1922 年 4 月 6 日) 5 頁。【1,200】

清水安三「世界基督教学生大会参列感想」(『北京週報』第 13 号、1922 年 4 月 16 日) 14 頁。【1,500】

清水安三「戦争と支那人のサイコロジイ」(『北京週報』第 15 号、1922 年 5 月 7 日) 10、28 頁。【1,800】

清水安三「支那の文化運動と宗教」(『開拓者』第 17 巻第 6 号、1922 年 6 月 1 日) 11-15 頁。【4,100】

清水安三「或る男の神」(『生命』第 258 号、1922 年 6 月 5 日) 43-49 頁。【3,000】

清水安三「反宗教運動の基督教会に及したる影響」(『北京週報』第 20 号、1922 年 6 月 11 日) 12 頁。  
【1,200】

清水安三「支那『思想革命』と『文学革命』」(『日本及日本人』第 839 号、1922 年 7 月 1 日) 23-43  
頁。【27,500】

如石生「当代支那人物(1) 黎元洪 (上)」(『讀賣新聞』、1922 年 7 月 25 日) 2 頁。【1,400】  
 如石生「当代支那人物(2) 黎元洪 (下)」(『讀賣新聞』、1922 年 7 月 26 日) 2 頁。【1,200】  
 如石生「当代支那人物(3) 吳佩孚 (上)」(『讀賣新聞』、1922 年 7 月 27 日) 2 頁。【1,700】  
 如石生「当代支那人物(4) 吳佩孚 (下)」(『讀賣新聞』、1922 年 7 月 28 日) 3 頁。【2,600】  
 如石生「当代支那人物(5) 顏惠慶と王正廷 (上)」(『讀賣新聞』、1922 年 8 月 1 日) 2 頁。【1,500】  
 如石生「当代支那人物(6) 顏惠慶と王正廷 (下)」(『讀賣新聞』、1922 年 8 月 1 日) 2 頁。【1,100】  
 如石生「当代支那人物(7) 馮玉祥 (上)」(『讀賣新聞』、1922 年 8 月 12 日) 3 頁。【1,400】  
 如石生「当代支那人物(8) 馮玉祥 (下)」(『讀賣新聞』、1922 年 8 月 13 日) 3 頁。【1,400】  
 如石生「当代支那人物(9) 曹錕と張作霖」(『讀賣新聞』、1922 年 8 月 14 日) 3 頁。【1,400】  
 如石生「当代支那人物(10) 張作霖 (一)」(『讀賣新聞』、1922 年 8 月 15 日) 2 頁。【1,800】  
 如石生「当代支那人物(11) 張作霖 (二)」(『讀賣新聞』、1922 年 8 月 17 日) 2 頁。【1,600】  
 如石生「当代支那人物(12) 張作霖 (三)」(『讀賣新聞』、1922 年 8 月 18 日) 2 頁。【1,400】  
 如石生「当代支那人物(13) 張作霖 (四)」(『讀賣新聞』、1922 年 8 月 20 日) 2 頁。【1,800】  
 如石生「当代支那人物(14) 張作霖 (五)」(『讀賣新聞』、1922 年 8 月 21 日) 2 頁。【1,100】  
 清水安三「支那国民性の実感」(『北京週報』第 30 号、1922 年 8 月 27 日) 15-16 頁。【3,000】  
 清水安三「支那の黎明運動」(『表現』第 2 卷第 9 号、1922 年 9 月 1 日) 148-157 頁。【19,600】  
 清水安三「人類愛の立場から」(『北京週報』第 33 号、1922 年 9 月 17 日) 8-9 頁。【6,100】  
 清水安三「大正十一年九月 支那人教育崇貞学校報告」(「在北京支那崇貞学校補助方ノ件 自大正十二年三月」アジア歴史資料センター、Ref. B05015394200、諸学校関係雑件 第一巻 H.4.3.0.12\_001、外務省外交史料館)。【2,800】  
 如石生「腰を据えた王寵恵」(『讀賣新聞』、1922 年 10 月 18 日) 2 頁。【2,100】  
 如石生「支那の新人 胡適 (一)」(『讀賣新聞』、1922 年 10 月 25 日) 3 頁。【900】  
 如石生「支那の新人 胡適 (二)」(『讀賣新聞』、1922 年 10 月 26 日) 3 頁。【1,400】  
 如石生「支那の新人 胡適 (三)」(『讀賣新聞』、1922 年 10 月 27 日) 3 頁。【1,600】  
 如石生「支那の新人 胡適 (四)」(『讀賣新聞』、1922 年 10 月 28 日) 3 頁。【1,100】  
 如石生「支那の新人 胡適 (五)」(『讀賣新聞』、1922 年 10 月 29 日) 3 頁。【2,100】  
 如石生「支那の新人 胡適 (六)」(『讀賣新聞』、1922 年 10 月 31 日) 3 頁。【2,400】  
 如石生「支那の新人 胡適 (七)」(『讀賣新聞』、1922 年 11 月 1 日) 3 頁。【2,400】  
 清水安三「支那の話」(『我等』第 4 卷第 11 号、1922 年 11 月 1 日) 62-69 頁。【6,700】  
 如石生「支那の新人 胡適 (八)」(『讀賣新聞』、1922 年 11 月 2 日) 3 頁。【1,700】  
 如石生「支那の新人 宣統帝 (一)」(『讀賣新聞』、1922 年 11 月 18 日) 3 頁。【1,400】  
 如石生「支那の新人 宣統帝 (二)」(『讀賣新聞』、1922 年 11 月 21 日) 3 頁。【1,600】  
 如石生「支那の新人 宣統帝 (三)」(『讀賣新聞』、1922 年 11 月 23 日) 3 頁。【1,400】  
 如石生「支那の新人 周三人 (上)」(『讀賣新聞』、1922 年 11 月 24 日) 3 頁。【1,400】  
 如石生「支那の新人 周三人 (中)」(『讀賣新聞』、1922 年 11 月 25 日) 3 頁。【1,300】  
 如石生「支那の新人 周三人 (下)」(『讀賣新聞』、1922 年 11 月 27 日) 3 頁。【1,200】  
 如石生「支那の新人 李大釗 (一)」(『讀賣新聞』、1922 年 11 月 28 日) 3 頁。【1,200】  
 如石生「支那の新人 李大釗 (二)」(『讀賣新聞』、1922 年 11 月 29 日) 3 頁。【1,400】  
 如石生「支那の新人 李石曾 (一)」(『讀賣新聞』、1922 年 12 月 1 日) 3 頁。【1,500】  
 清水安三「支那の話」(『我等』第 4 卷第 12 号、1922 年 12 月 1 日) 42-50 頁。【8,200】  
 如石生「支那の新人 李石曾 (二)」(『讀賣新聞』、1922 年 12 月 3 日) 3 頁。【1,500】

〈1923 年〉 32 歳

- 清水安三「支那を恫う見る」(『北京週報』第 48 号、1923 年 1 月 14 日) 9-11 頁。【3,100】
- 清水安三「支那の話(続き)」(『我等』第 5 巻第 2 号、1923 年 2 月 1 日) 33-42 頁。【8,600】
- 清水安三「満洲還附論是非」(『表現』第 3 巻第 2 号、1923 年 2 月 1 日) 96-106 頁。【10,300】
- 清水安三「支那の議会见物(一)―日本のと比べて」(『讀賣新聞』、1923 年 2 月 19 日) 2 頁。【1,800】
- 清水安三「支那の議会见物(二)―不思議の時計」(『讀賣新聞』、1923 年 2 月 21 日) 3 頁。【1,900】
- 清水安三「支那の議会见物(三)―どえらい権力」(『讀賣新聞』、1923 年 2 月 22 日) 3 頁。【1,600】
- 清水安三「支那学生運動の功過」(『北京週報』第 59 号、1923 年 4 月 1 日) 14-15 頁。【5,200】
- 清水安三「北京より(一)―新と旧(1)」(『讀賣新聞』、1923 年 4 月 9 日) 3 頁。【1,600】
- 清水安三「北京より(二)―新と旧(2)」(『讀賣新聞』、1923 年 4 月 13 日) 3 頁。【2,200】
- 清水安三「北京より(三)―支那の女(1)」(『讀賣新聞』、1923 年 4 月 14 日) 2 頁。【1,300】
- 清水安三「北京より(四)―支那の女(2)」(『讀賣新聞』、1923 年 4 月 15 日) 3 頁。【1,300】
- 清水安三「北京より(五)―革命婦人(1)」(『讀賣新聞』、1923 年 4 月 16 日) 3 頁。【1,800】
- 清水安三「北京より(六)―革命婦人(2)」(『讀賣新聞』、1923 年 4 月 17 日) 3 頁。【1,400】
- 清水安三「北京より(七)―革命婦人(3)」(『讀賣新聞』、1923 年 4 月 18 日) 3 頁。【1,600】
- 清水安三「北京より(八)―婦女運動(1)」(『讀賣新聞』、1923 年 4 月 19 日) 3 頁。【1,800】
- 清水安三「北京より(九)―婦女運動(2)」(『讀賣新聞』、1923 年 4 月 20 日) 2 頁。【1,400】
- 清水安三「北京より(十)―エロシエンコ(1)」(『讀賣新聞』、1923 年 4 月 23 日) 3 頁。【2,000】
- 清水安三「北京より(十一)―エロシエンコ(2)」(『讀賣新聞』、1923 年 4 月 24 日) 3 頁。【1,800】
- 清水安三「北京より(十二)―学生運動(1)」(『讀賣新聞』、1923 年 4 月 29 日) 2 頁。【1,500】
- 清水安三「北京より(十三)―学生運動(2)」(『讀賣新聞』、1923 年 4 月 30 日) 3 頁。【1,500】
- 清水安三「足洗ふ人―自叙伝の一節」(『表現』第 3 巻第 5 号、1923 年 5 月 1 日) 67-77 頁。【11,000】
- 清水安三「北京より(十四)―学生運動(3)」(『讀賣新聞』、1923 年 5 月 2 日) 3 頁。【1,600】
- 清水安三「北京より(十五)―支那らしい示威運動(4)」(『讀賣新聞』、1923 年 5 月 3 日) 3 頁。【1,900】
- 清水安三「北京より(十六)―国恥記念日」(『讀賣新聞』、1923 年 5 月 5 日) 2 頁。【1,800】
- 清水安三「北京より(十七)―日支経済絶交」(『讀賣新聞』、1923 年 5 月 7 日) 3 頁。【1,600】
- 清水安三「北京より(十八)―過激思想の人々(1)」(『讀賣新聞』、1923 年 5 月 8 日) 2 頁。【1,600】
- 清水安三「北京より(十九)―過激思想の人々(2)」(『讀賣新聞』、1923 年 5 月 12 日) 3 頁。【1,400】
- 清水安三「北京より(二十)―過激思想の人々(3)」(『讀賣新聞』、1923 年 5 月 13 日) 3 頁。【1,700】
- 清水安三「北京より(二十一)―過激思想の人々(4)」(『讀賣新聞』、1923 年 5 月 14 日) 3 頁。【1,600】
- 如石生「呉佩孚を洛陽に訪ふ―陣営に宿りて(一)」(『讀賣新聞』、1923 年 5 月 25 日) 3 頁。【1,300】
- 如石生「呉佩孚を洛陽に訪ふ―陣営に宿りて(二)」(『讀賣新聞』、1923 年 5 月 26 日) 3 頁。【1,400】
- 如石生「呉佩孚を洛陽に訪ふ―陣営に宿りて(三)」(『讀賣新聞』、1923 年 5 月 27 日) 3 頁。【1,400】
- 清水安三「呉子玉論」(『北京週報』第 66 号、1923 年 5 月 27 日) 14-15、13 頁。【3,000】
- 如石生「呉佩孚を洛陽に訪ふ―陣営に宿りて(四)」(『讀賣新聞』、1923 年 5 月 28 日) 3 頁。【1,000】
- 如石生「呉佩孚を洛陽に訪ふ―陣営に宿りて(五)」(『讀賣新聞』、1923 年 5 月 30 日) 3 頁。【1,300】
- 如石生「呉佩孚を洛陽に訪ふ―陣営に宿りて(六)」(『讀賣新聞』、1923 年 5 月 31 日) 3 頁。【1,400】
- 如石生「呉佩孚を洛陽に訪ふ―陣営に宿りて(七)」(『讀賣新聞』、1923 年 6 月 1 日) 3 頁。【1,100】
- 清水安三「足洗ふ人」(『表現』第 3 巻第 6 号、1923 年 6 月 1 日) 90-101 頁。【12,000】
- 如石生「呉佩孚を洛陽に訪ふ―陣営に宿りて(八)」(『讀賣新聞』、1923 年 6 月 2 日) 3 頁。【1,400】
- 清水安三「足洗ふ人(三)」(『表現』第 3 巻第 7 号、1923 年 7 月 1 日) 119-128 頁。【8,000】

清水安三「恐ろしき一夜（『足洗ふ人』の続）」（『表現』第3巻第10号、1923年10月1日）123-129頁。【6,600】

清水安三「焼跡からの掘出物」（『基督教世界』第2079号、1923年10月4日）5頁。【2,300】

清水安三「焼跡からの掘出物（二）」（『基督教世界』第2080号、1923年10月11日）5頁。【1,500】

清水安三「北京に於ける耶蘇教」（丸山昏迷編『北京 増訂版第三版』大阪屋号書店、1923年10月13日）234-249頁。【6,400】

清水安三「焼跡からの掘出物（三）」（『基督教世界』第2082号、1923年10月25日）5頁。【2,500】

清水安三「焼跡からの掘出物（四）」（『基督教世界』第2083号、1923年11月1日）5頁。【2,600】

清水安三「支那伝道論」（『生命』第276号、1923年12月5日）6-21頁。【9,600】

清水安三「汪栄宝論」（『北京週報』第93号、1923年12月16日）15-16頁。【2,100】

清水安三「憲法と孔丘」（『北京週報』第94号、1923年12月23日）4-6頁。【3,300】

### 〈1924年〉33歳

清水安三「支那最近の孔教に就て」（『新人』第25巻第1号、1924年1月1日）31-40頁。【10,100】

清水安三「支那基督教史論」（『北京週報』第96号、1924年1月13日）4-12頁。【12,000】

清水安三「支那婦人運動」（『北京週報』第98号、1924年1月27日）4-13頁。【14,000】

清水安三「支那思想革命」（『新人』第25巻第2号、1924年2月1日）27-39頁。【13,900】

清水安三「支那婦人運動（続）」（『北京週報』第99号、1924年2月3日）4-13頁。【42,000】

清水安三「支那教育事情」（『北京週報』第100号、1924年2月10日）7-13頁。【9,500】

清水安三「最近の支那思想界」（『北京週報』第101号、1924年2月17日）6-15頁。【13,000】

清水安三「支那の主義者を紹介す」（『北京週報』第102号、1924年2月24日）6-15頁。【14,000】

清水安三「宗教的アナーキズムに就て」（『新人』第25巻第3号、1924年3月1日）70-77頁。【7,800】

清水安三「現支那の文学」（『北京週報』第103号、1924年3月2日）4-12頁。【12,000】

清水安三「カラハンを訪ふ—こゝを訪れた赤い日本の人々」（『北京週報』第104号、1924年3月9日）4-9頁。【7,900】

清水安三「漢字革命」（『北京週報』第105号、1924年3月16日）4-11頁。【11,000】

清水安三「支那文学革命」（『北京週報』第106号、1924年3月23日）4-15頁。【16,000】

清水安三「江亢虎論」（『北京週報』第107号、1924年4月6日）22-27頁。【4,700】

清水安三「最近支那の思想変遷」（『北京週報』第108号、1924年4月13日）11-18頁。【11,000】

清水安三「詩聖ダゴール」（『北京週報』第109号、1924年4月20日）8-11頁。【5,000】

清水安三「詩聖ダゴール（接前号）」（『北京週報』第110号、1924年4月27日）14-15頁。【2,300】

清水安三「梁啓超の思想及人物」（『北京週報』第110号、1924年4月27日）5-10頁。【7,200】

清水安三「五四運動史論」（『北京週報』第111号、1924年5月4日）4-8頁。【6,700】

清水安三「詩聖ダゴール（接前号）」（『北京週報』第111号、1924年5月4日）14-15、12頁。【2,800】

清水安三「梁啓超の思想及人物」（『北京週報』第112号、1924年5月11日）7-10頁。【2,700】

清水安三「梁啓超の思想及人物（続）」（『北京週報』第113号、1924年5月18日）7-9、31頁。【4,200】

清水安三「孫文の思想及人物」（『北京週報』第115号、1924年6月1日）6-7頁。【2,600】

清水安三「孫文の思想及人物（続）」（『北京週報』第116号、1924年6月8日）9-12、15頁。【5,800】

清水安三「孫文の思想及人物（続）」（『北京週報』第117号、1924年6月15日）7-11頁。【6,100】

清水安三「孫文の思想及人物（続）」（『北京週報』第118号、1924年6月22日）4-7頁。【5,400】

清水安三「支那語研究に就いて」（『北京週報』第119号、1924年7月6日）14-16頁。【3,900】

清水安三「辜鴻銘の思想と人物」(『北京週報』第123号、1924年8月3日)7-13頁。【9,600】

清水安三「陳独秀論」(『北京週報』第124号、1924年8月10日)12-15頁。【5,400】

清水安三「支那より見たる日米問題」(『基督教世界』第2123号、1924年8月14日)5頁。【1,800】

清水安三「崇貞女学校の沿革」(『基督教世界』第2123号、1924年8月14日)5頁。【1,200】

清水安三『支那新人と黎明運動—新儒教、新文学、新運動』(大阪屋号書店、1924年10月12日)387頁。【180,000】

清水安三「旅行免状を得るまで」(『基督教世界』第2131号、1924年10月16日)7頁。【2,200】

清水安三「北京よりシカゴまで」(『北京週報』第133号、1924年10月19日)7-10頁。【4,100】

清水安三「北京よりシカゴまで(続)」(『北京週報』第134号、1924年10月26日)18-21頁。【4,700】

清水安三「北京よりシカゴまで(続)」(『北京週報』第135号、1924年11月2日)13-14頁。【2,400】

清水安三「北京よりシカゴまで(続)」(『北京週報』第136号、1924年11月9日)10-12頁。【3,700】

清水安三『支那当代新人物—旧人と新人』(大阪屋号書店、1924年11月10日)298頁。【160,000】

清水安三「布哇の問題」(『基督教世界』第2139号、1924年12月11日)5頁。【2,100】

清水安三「布哇の問題(其二)」(『基督教世界』第2140号、1924年12月18日)5頁。【1,500】

註1：年齢は、6月1日の誕生日を迎えた後の満年齢とした。

註2：末尾にある【 】内に記した数字は、大凡の文字数である。

## 註

- 1) 本稿が用いた主な史料は、拙稿「清水安三初期文集」(上)、(下)(『立命館経済学』第73巻第3号、及び第74巻第1号、2024年、2025年)に翻刻した。併せて参照されたい。
- 2) 以上の経緯については、拙稿「『原生』とは誰なのか?—キリスト教界・治安維持法・一九二五年」(『キリスト教文化』第10号、2017年)も参照されたい。
- 3) 太田雅夫「清水安三と沢崎堅造」(『朝日ジャーナル』第14巻第26号、1972年)、及び田中芳三『荒野に花も咲く—清水安三物語』(一麦社、1980年)。
- 4) 栃木利夫「清水安三先生と中国革命」(『産研通信』第9・10号、1984年)。
- 5) 寺崎暹「清水安三と中国—『基督教世界』を廻って」(『キリスト教社会問題研究』第40号、1992年)。
- 6) 樽松かほる『小泉郁子の研究』(学文社、2000年)、李衛紅『清水安三と北京崇貞学園』(不二出版、2009年)、及び小林茂『東支那海を越えて—清水安三先生の前半生』(私家版、2011年)。
- 7) 山崎朋子『朝陽門外の虹』(岩波書店、2003年)。
- 8) 太田哲男『清水安三と中国』(花伝社、2011年)。太田は以降も、同「崇貞学園・桜美林学学園と清水安三」(『アジア文化研究別冊』21、2016年)、同『清水安三と中国(続)—その人的ネットワークと学校』(私家版、2018年)、同「崇貞学園史断章—年表作成作業のなかから」(『学園史研究』創刊号、2021年)などの成果を、精力的に発表している。また、樽松かほる「北京崇貞学園への日本政府の財政援助—日中戦争後の事例を中心に」(樽松かほる・大島宏・高瀬幸恵・柴沼真・影山礼子・辻直人『戦時下のキリスト教主義学校』(教文館、2017年)、樽松かほる「清水安三の青年期における思想形成と崇貞学園での実践」(『学園史研究』第2号、2022年)などは、実証性重視の姿勢を明確にした研究である。拙稿「『支那通』クリスチャンと日中戦争—清水安三の働きをめぐって」(『キリスト教史学』第73集、2019年)、及び拙稿「中国におけ



- る清水安三の記録について」(『立命館経済学』第 68 巻第 2 号、2019 年)は、かかる動向を強く意識してまとめた。
- 9) 清水安三著、太田哲男・樽松かほる・李恩民校閲『朝陽門外』(桜美林大学出版会、2021 年)。
  - 10) 桜美林学園チャプレン会編『無我夢中－桜美林学園の創立者・清水安三の信仰と実践』(新教出版社、2022 年)。
  - 11) 「近江八幡でみつけた清水安三関連書簡」(『清水安三・郁子研究』第 11 号、2019 年) 71-73 頁。
  - 12) 『近江八幡基督教会略史』(近江八幡基督教会、1926 年 3 月) 32 頁。
  - 13) 「神学生卒業論文朗読会」(『同志社時報』第 119 号、1915 年 4 月 1 日) 5 頁。
  - 14) *The Omi Musutard-Seed*, vol. 8, no. 9, Feb. 1915, p. 200.
  - 15) *The Omi Musutard-Seed*, vol. 9, no. 1, May. 1915, p. 39. 及び「人事往復」(『湖畔之聲』第 31 号、1915 年 5 月 5 日) 6 頁。
  - 16) 「個人消息」(『同志社時報』第 126 号、1915 年 12 月 1 日) 14 頁。
  - 17) 「転居一束」(『同志社時報』第 127 号、1916 年 1 月 1 日) 4 頁。
  - 18) 「校友通信」(『同志社時報』第 127 号、1916 年 1 月 1 日) 3 頁。なお引用文において句読点が省略されている場合、本稿では括弧 [ ] を用いて補った。
  - 19) 「校友通信」(『同志社時報』第 138 号、1917 年 1 月 1 日) 74 頁。
  - 20) ‘Baba Student Y.M.C.A.’ *The Omi Mustard-Seed*, vol. 10, no. 9, Feb. 1917, pp. 261-262.
  - 21) 「校友通信」(『同志社時報』第 145 号、1917 年 8 月 1 日) 10-11 頁。
  - 22) 清水安三「故国の友に与へて」(『湖畔之聲』第 57 号、1917 年 7 月 5 日) 4 頁。
  - 23) 「朝鮮教化に就て天下の有志に訴ふ」(日本組合基督教会朝鮮教化資金募集委員、1913 年 10 月) 5 頁 [同志社大学人文科学研究所所蔵]。
  - 24) 海老名弾正「朝鮮教化資金募集要請状及申込証」(1913 年) [同志社大学人文科学研究所所蔵]。
  - 25) 高木貞衛「伝道は信徒最大の使命」(『基督教世界』第 1572 号、1913 年 11 月 6 日) 2 頁。
  - 26) 朝陽「現状打破と局面展開」(『基督教世界』第 1620 号、1914 年 10 月 8 日) 1 頁。
  - 27) TM「新年の夢」(『基督教世界』第 1682 号、1916 年 1 月 1 日) 1-2 頁。
  - 28) 「組合教会の海外発展」(『基督教世界』第 1690 号、1916 年 2 月 24 日) 1-2 頁。
  - 29) 「日本組合基督教会略史」(『大正七年日本組合教会便覧』、1918 年 7 月) 16-17 頁。
  - 30) 「支那伝道論」(『基督教世界』第 1717 号、1916 年 8 月 31 日) 1 頁。
  - 31) 北京城頭の人「支那に於ける基督教一斑」(『同志社時報』第 137 号、1916 年 12 月 1 日) 10-11 頁。
  - 32) 「平和後の曙光」(『基督教世界』第 1741 号、1917 年 2 月 15 日) 1-2 頁。
  - 33) 九転十起生「我国中心点の移動－東京乎大阪乎」(『基督教世界』第 1754 号、1917 年 5 月 17 日) 7-8 頁。
  - 34) 「中華民国続行委辦会」(『基督教世界』第 1755 号、1917 年 5 月 24 日) 12 頁、及び原田助「支那所見一斑(上)」(『基督教世界』第 1757 号、1917 年 6 月 7 日) 5-6 頁、原田助「支那所見一斑(下)」(『基督教世界』第 1758 号、1917 年 6 月 14 日) 4-5 頁。
  - 35) 「大津組合教会」(『基督教世界』第 1756 号、1917 年 5 月 31 日) 14 頁。
  - 36) 「組合教会支那伝道」(『大阪朝日新聞』1917 年 6 月 6 日、夕刊) 2-3 面欄外。
  - 37) 牧野虎次「満蒙紀行(上)」(『基督教世界』第 1761 号、1917 年 7 月 5 日) 8 頁。
  - 38) 原田助「支那漫遊所感」(『同志社時報』第 144 号、1917 年 7 月 1 日) 3 頁。
  - 39) 「奉天通信」(『基督教世界』第 1764 号、1917 年 7 月 26 日) 12 頁。

- 40) 協同伝道の概要については、全国協同伝道委員編『三年継続全国協同伝道』（1918年8月）に詳しい。なお、1908年には日本基督奉天教会が設立され、清水赴任に先だって邦人伝道を進めていた。
- 41) 前掲書『大正七年日本組合教会便覧』80頁。
- 42) 「奉天瀋陽教会」（『基督教世界』第1767号、1917年8月16日）14頁。
- 43) 前掲書『大正七年日本組合教会便覧』125頁。
- 44) 牧野虎次「新伝道地開始報告」（『大正七年日本組合教会便覧』、1918年6月緒言）147頁。
- 45) 「三年継続特別伝道」（『基督教世界』第1786号、1918年1月1日）1頁。
- 46) 「博物室寄附報告」（『同志社時報』第148号、1917年12月1日）11頁。
- 47) 「奇怪を極めたる同志社紛擾事件の真相」（『新京都』第8巻第7号、1918年7月1日）50-63頁 [京都府立京都学・歴彩館所蔵]。
- 48) 清水安三「雑誌『新京都』七月号を読みて冤を雪がむ為めに弁明す」（『同志社時報』第157号、1918年10月1日）10頁。
- 49) 清水に対する歴年の支援については、西川正治郎・加藤直士『高木貞衛翁伝』（萬年社、1950年、151頁）、あるいは山本武利「創業者高木貞衛の広告理念と行動」（竹内幸絵・難波功士編『広告の夜明け—大阪・萬年社コレクション研究』思文閣出版、2017年）等に纏められている。
- 50) 『大正八年日本組合教会便覧』、1919年7月、114頁。
- 51) 西尾幸太郎「新伝道地及応援地報告」（『大正八年日本組合教会便覧』）137頁。
- 52) 清水安三「北京通信」（『基督教世界』第1857号、1919年5月22日）13頁。
- 53) この学校については、黄漢青「支那語研究舎の変遷及びその実態」（『慶應義塾大学日吉紀要—言語・文化・コミュニケーション』第39号、2007年）169-171頁、及び那須清編『北京同学会の回想』（不二出版、1995年）などを参照。
- 54) 木村清松「雑感数則」（『基督教世界』第1854号、1919年5月1日、8頁）に始まり、木村清松「奉天伝道記」（『基督教世界』第1855号、1919年5月8日、8頁）から木村清松「奉天伝道記（第十一信）」（『基督教世界』第1866号、1919年7月24日、8頁）、更に木村清松「上海伝道記（上）」（『基督教世界』第1880号、1919年11月6日、8-9頁）、及び木村清松「北京訪問記」（『基督教世界』第1881号、1919年11月13日、8頁）。
- 55) 西尾幸太郎「新伝道地及応援地報告」（『大正九年日本組合教会便覧』、1920年7月）162-163頁。
- 56) 「日本組合基督教会畧史」（同上『大正九年日本組合教会便覧』）12頁。
- 57) 同上『大正九年日本組合教会便覧』94頁。
- 58) 清水安三「支那生活の批判」（『我等』第1巻第6号、1919年5月1日）28-33頁。
- 59) 清水安三「在支外人生活の批判」（『我等』第1巻第14号、1919年12月1日）21-28頁。
- 60) 「日支親善の為に北京大学の教授近く来朝に決す／黎明会の主義に賛成して日本から吉野博士が行く」（『東京日日新聞』1919年8月13日、朝刊）7面。
- 61) 「日支親善運動／吉野作造博士談」（『大阪毎日新聞』1920年5月1日、朝刊）1面。
- 62) 西尾幸太郎「総務部事務報告（自大正九年一月至七月）」（『大正十年日本組合基督教会便覧』）152頁。
- 63) 「大正八年度日本組合基督教会経常費収支決算報告」（『大正十年日本組合基督教会便覧』）221-222頁。
- 64) 藤田九皐「私には支那がこう観える」（『基督教世界』第1906号、1920年5月30日）5-6頁。
- 65) 曾根三治「上海だより」（『基督教報』第573号、1920年9月8日）8-9頁。

- 66) 「崇貞女学校」(『北京週報』第12号、1922年4月9日、25頁)は、北京(清水安三)・上海(古屋孫三郎)・青島(松井文彌)・奉天(渡部守成)・大連(磯部敏郎)の伝道を並記して紹介している。
- 67) 賀川豊彦「北京の冥想の朝」(一)～(四)(『中外日報』1920年9月25日-9月29日)。既に賀川豊彦「新伝道論」(『基督教世界』第1771号、1917年9月13日、10-11頁)の如き貧困救済の重要性が説かれ、安三もこれに刺激されたのだろう。詳細は拙稿「賀川豊彦による民国形象攷—1920年代を中心に」(『立命館経営学』第63巻第6号、2025年)を参照。余談であるが、中国に関心を持つ端緒になったと清水本人が回顧する徳富蘇峰『支那漫遊記』(民友社、1918年)を懷中に賀川は各地を巡り、帰国直後の9月15日には蘇峰宛に丁寧な礼状を書いている[公益財団法人徳富蘇峰記念館所蔵]。したがって、賀川による高い評価を清水が自らの記憶として継承した可能性があるのではないか。
- 68) 清水研究の文脈からも吉野による仲介を論じる研究が多い。例えば太田秀男『清水安三と中国』(花伝社、2011年、86-97頁)は、松尾尊兌「吉野作造の中国論」(『吉野作造選集』第8巻、岩波書店、1996年)などの先行研究に加えて、「日支親善運動 吉野作造博士談」(『大阪毎日新聞』1920年5月1日、朝刊、1面)の分析等も付加して二人の関係を説く。ちなみに同日の『大阪毎日』トップには「支那と過激主義」と題した社説が掲載されており、当時のマスコミにおける認識の一端を伺わせる。
- 69) 樽松かほる「賀川豊彦と桜美林学園」(『清水安三・郁子研究』第10号、桜美林大学、2018年)は、近江ミッション関係者が仲介役であった可能性を説く。清水の経歴に加えて、1918年4月に開催された在日本ミッション同盟社会福祉委員会における報告に感銘を受けたヴォーリズが賀川を近江八幡に招いた事実、また神戸出身の吉田悦藏との近しき関係などを考えると(吉田与志也『信仰と建築の冒険』サンライズ出版、2019年、359-360頁)、説得力を持つ見解だと思われる。
- 70) この問題については、拙稿「丸山傳太郎の中国伝道をめぐって—清末・民国初年」(『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第53号、2021年、100-101頁)で中間的総括を示した。
- 71) ‘The Japanese Boycott, An Interesting Move’, “*The North-China Daily News*”, Apr. 1, 1920. 及び ‘The Japanese Boycott, An Interesting Move, Appeal Made to Foreign Missionaries from Owe Owe Correspondent’, “*The North-China Herald and Supreme Court & Consular Gazette*”, Apr. 3, 1920. この記事については、青山学院大学の土肥歩氏から御教示を受けた。
- 72) 清水安三「異邦伝道者の悩み」(『大阪講壇』第231号、1920年3月)30-31頁。
- 73) 清水安三「果して日本基督教徒に支那伝道の使命ありや」(『基督教世界』第1928号、1920年10月14日)3-4頁。
- 74) 「北京留学費報告」(『大正十一年日本組合教会便覧』、1922年8月)127-128頁。
- 75) 丸山昏迷については、山下恒夫「薄倖の先駆者・丸山昏迷」1-4(『思想の科学』第七次第81号-84号、1986年9月-12月)に詳しい。
- 76) 清水安三「北京に於ける耶蘇教」(丸山昏迷編『北京』丸山幸一郎、1921年3月25日)422-439頁。
- 77) 速報性を重視した報告として、『北支大饑饉調査報告書』(東亜同文書院、1920年か?)がある。帝国図書館納本は1921年5月であるが、叙述内容から1920年に印刷された可能性が高い。
- 78) 存命中に刊行された松岡譲編『中山龍次』(中山龍次先生顕彰会、1958年、179-191頁)は、年次の誤りはあるものの朝陽門外の崇貞、門内の国民小学育成学校、そして大日本支那語同学会

を、中山が育てた教育事業だと強調する。

- 79) 鈴木擇郎・藤井禎輔・城慶次・鶴見壽・和田宗二・藤野進『北支那飢饉救済の調査』（東亜同文書院研究部、1921年10月10日）12頁。
- 80) 『北支那旱災救済事業報告』（日華実業協会、1921年12月28日）39-40頁。
- 81) 「北支那各地ニ於ケル救災事業援助者氏名」（同上書）81-83頁。
- 82) 「賑務處函陸軍部准日華實業協會代表中山龍次函稱太平倉已接收清楚不勝感謝等情函達查照文」十年三月七日（『賑務通告』第12期、内務部賑務處、1921年4月15日）55頁。
- 83) 清水安三「北京通信」（『基督教世界』1951号、1921年3月31日）6-7頁。
- 84) 清水安三「支那伝道に就きまして」（『伝道月報』第70号、1921年10月20日）4頁。
- 85) 'Mr. Shimidzu's Visit', *The Omi Mustard-Seed*, vol. 15, no. 6 & 7, Des. 1921, pp. 160-162.
- 86) 'Monthly Report', *The Omi Mustard-Seed*, vol. 15, no. 8, Feb. 1922, p. 201.
- 87) 「北京留学費報告」（『大正十二年日本組合教会便覧』1923年7月）193頁。
- 88) 小島麗逸「『北京週報』（1922年1月-1930年9月）と藤原鎌兄」（『アジア経済』第13巻第12号、1972年）30-46頁。丸山については、王俊文「『純粹な信仰』—丸山昏迷の思想と大正デモクラシー」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第26号、2023年）における紹介も参照。
- 89) 清水安三「新支那の黎明運動」（『表現』第2巻第9号、1922年9月）155-157頁。
- 90) 清水安三「北京通信」（『基督教世界』第2002号、1922年4月6日）5頁。
- 91) 「各处參觀記 崇貞女学校」（『北京週報』第12号、1922年4月9日）25-26頁、及び無関心「京の人々 清水安三氏」（『北京週報』第13号、1922年4月16日）16頁。
- 92) 清水安三『支那人教育崇貞学校報告』（1922年9月）。この史料は、清水の支援者であった東北帝大教授の佐藤定吉が、東方文化事業による助成を申請した外務省記録に収録されている（「在北京支那崇貞学校補助方ノ件 自大正十二年三月」アジア歴史資料センター、Ref. B05015394200、諸学校関係雑件 第一巻 H.4.3.0.12\_001、外務省外交史料館）。
- 93) 土肥昭夫「清水安三の信仰と生き方」（樽松かほる編『創立者たちの信仰と生き方』桜美林大学清水安三記念プロジェクト、2007年）5-12頁。
- 94) 一記者「日支基督教徒協議会概況」（『基督教世界』第1999号、1922年3月16日）8-9頁。
- 95) 海老沢亮「東洋教化の使命（二）」（『基督教世界』第1998号、1922年3月9日）4頁。
- 96) 一記者「日華基督教徒協議会に就て」（『基督教世界』第2018号、1922年7月27日）9頁。
- 97) 『大正十三年日本組合教会便覧』、1924年7月、70頁。
- 98) 『大原孫三郎伝』（大原孫三郎伝刊行会、1983年）189-192頁。
- 99) 清水安三「満洲還附論是非」（『表現』第3巻第2号、1923年2月）104-107頁。
- 100) 野口援太郎「北支那飢饉救済義捐金交附（第二）」（『帝国教育』第488号、1923年3月）101頁。
- 101) 清水安三「足洗ふ人一自叙伝の一節」（『表現』第3巻第5号、1923年5月）68-73頁。
- 102) 清水安三「足洗ふ人」（『表現』第3巻第6号、1923年6月）100-101頁。
- 103) 清水安三「足洗ふ人（三）」（『表現』第3巻第7号、1923年7月）119-123頁。
- 104) 清水安三「恐ろしき一夜（『足洗ふ人』の続）」（『表現』第3巻第10号、1923年10月）123-129頁。
- 105) 清水安三「焼跡からの掘出物」（『基督教世界』第2079号、1923年10月4日）5頁。これは連作であり、「焼跡からの掘出物（二）」（『基督教世界』第2080号、1923年10月11日）5頁、「焼跡からの掘出物（三）」（『基督教世界』第2082号、1923年10月25日）5頁、「焼跡からの掘出物（四）」（『基督教世界』第2083号、1923年11月1日）5頁、と続く。

- 106) 'Seeds', *The Omi Mustard-Seed*, vol. 17, no. 6, Dec. 1923, pp. 151-152.
- 107) 清水安三「北京に於ける耶蘇教」(丸山昏迷編『北京 増訂版第三版』大阪屋号書店、1923年10月) 234-249頁。
- 108) 「清水安三氏」(『基督教世界』第2123号、1924年8月14日) 2頁。
- 109) 清水安三『支那当代新人物-旧人と新人』(大阪屋号書店、1924年) 自序 1-6頁。
- 110) 清水安三「支那より見たる日米問題」(『基督教世界』第2123号、1924年8月14日) 6頁。
- 111) 清水安三「北京よりシカゴまで」(『北京週報』第133号、1924年10月19日) 7頁。
- 112) 清水安三「北京よりシカゴまで(続)」(『北京週報』第134号、1924年10月26日) 19頁。
- 113) 「日支親交の基調」(『基督教世界』第2123号、1924年8月14日) 2頁。
- 114) 清水安三「崇貞女学校の沿革」(『基督教世界』第2123号、1924年8月14日) 5頁。
- 115) 「対談 和やかに支那を語る-賀川豊彦・清水安三対談会」(『週刊朝日』通巻987号、1939年4月19日) 40頁。
- 116) 清水安三「活ける供物-支那少女の母『崇貞学園』苦闘史」(『新女苑』第1巻第4号、1937年4月1日) 144頁。
- 117) 清水安三「愛的学校(崇貞学園)日記」(『新女苑』第3巻第2号、1939年2月1日) 272-279頁、及び同「愛的学校崇貞学園日記」(『新女苑』第3巻第3号、1939年3月1日) 162-171頁。
- 118) 清水安三・清水郁子編『崇貞学園小史』(崇貞女学校、1936年10月) 1-2頁。
- 119) 「崇貞女学校」(徐珂編『増訂実用北京指南』商務印書館、第五編：公共事業、1926年9月) 10頁。
- 120) 代昌「朝陽門外芳草地／崇貞学園／清水安三先生一手創辦／現在已經有二十年歴史」(『民衆畫報』第4期、1939年5月1日) 3-4頁。
- 121) 清水安三「崇貞女学校の沿革」(『基督教世界』第2123号、1924年8月14日) 5頁。
- 122) 清水安三『朝陽門外』(朝日新聞社、1939年) 107-111頁。
- 123) 清水安三『支那人教育崇貞学校報告』(1922年9月)。
- 124) 清水安三「活ける供物-支那少女の母『崇貞学園』苦闘史」(『新女苑』第1巻第4号、1937年4月1日) 145-146頁
- 125) 清水安三『姑娘の父母-崇貞ロマンス』(改造社、1939年) 3-51頁。
- 126) 湯浅興三『基督に在る自由を求めて-日本組合基督教会史』(創文社、1958年) 416-417頁。
- 127) この点について、清水の信仰は「多様性」を認めた「融通無碍」こそが本質だと説く小林茂「商人道的キリスト教-桜美林学園創立者清水安三先生の生き方」(『基督教世界』第3536号、1995年1月10日、3-4頁)は、極めて正鵠を射た評価だと思う。

## 謝辞

本稿は、公益財団法人JFE21世紀財団アジア歴史研究助成による研究成果の一部である。史料閲覧に際しては、国立国会図書館、早稲田大学総合図書館、公益財団法人東洋文庫、同志社大学神学部研究室、同志社大学人文科学研究所、同志社大学社史資料センター、大谷大学図書館、神戸大学社会科学系図書館、大阪大学総合図書館、国際日本文化研究センター図書館、京都府立京都学・歴史館、東京大学東洋文化研究所図書館、中央研究院近代史研究所郭廷以図書館のお世話になった。

また、稀観本たる *The Omi Mustard-seed* に掲載された清水をめぐる記事は立命館大学社会システム研究所上席研究員・吉田与志也氏、ヨミダスや国立国会図書館所蔵マイクロフィルムに未収録の『讀賣新



聞』（1923年4月20日朝刊）紙面は日本新聞博物館学芸員・工藤路江氏の御厚意によって閲覧が可能となった。2023年12月16日に明治学院大学で開催されたアジアキリスト教交流史研究会大会で報告した初歩的な構想に対して有意義なアドバイスを下さった方々を含めて、衷心よりお礼を申し上げたい。